

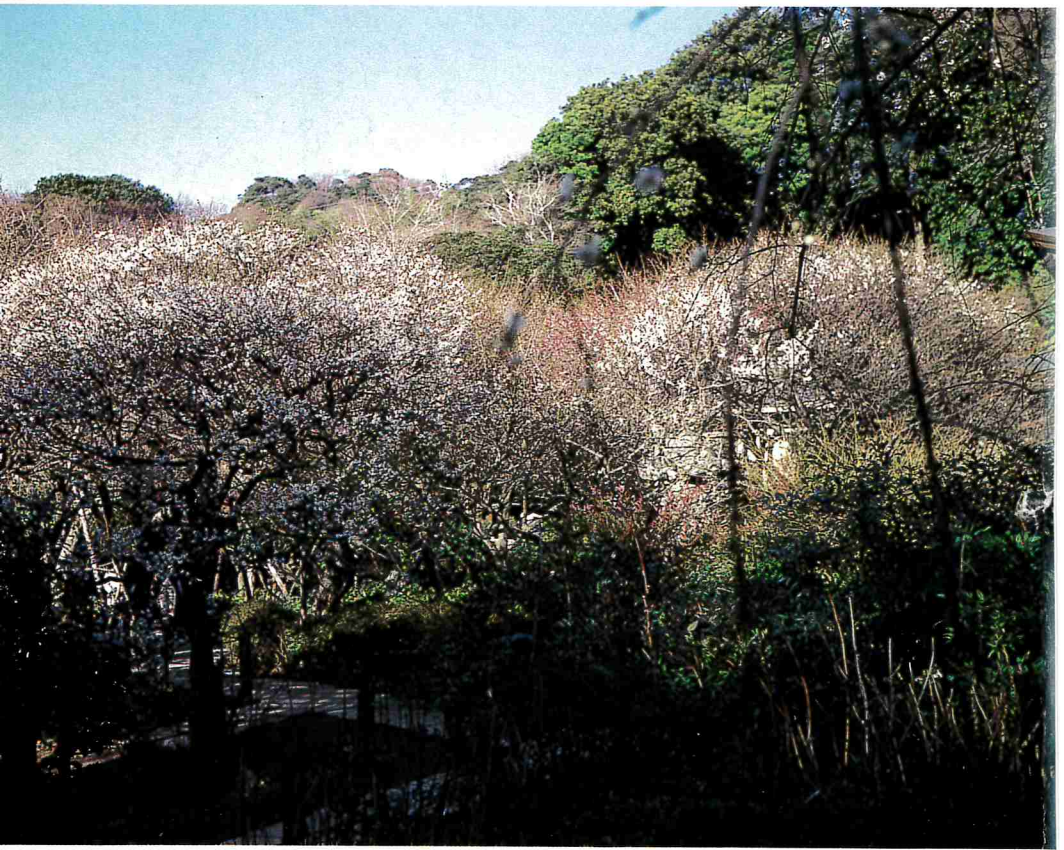
獅

平成元年
2月号

友

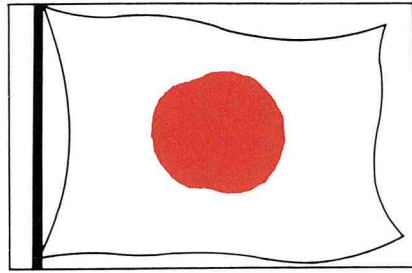
1989
February

昭和三十一年七月
平成元年二月一日(毎月一回一日発行)
第三十五卷第二号(通巻四〇八号)
第三種郵便物認可



—自然美散策(瑞泉寺庭園)—(解説表2下段)

デタント的な 世界の風潮に 気を許す勿れ



表紙写真の解説

写真家 宝蔵寺 忠

—— 自然美散策(瑞泉寺庭園) ——

—— 神奈川県鎌倉市二階堂所在 ——

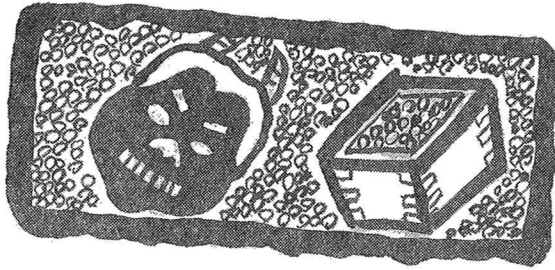
鎌倉二階堂「大塔の宮」の横の道を、だらだら坂を登って行き(約八百米、最後の石段をエッチラ、オッチラと登り切ると瑞泉寺の山門がある。山門をくぐって入ると花いっぱい庭。色とりどりの花の風がゆるる早春、紅・白梅・水仙ごしにみる白壁の観音堂は抜群の風情。水仙・梅・ボタン・藤・紫陽花・フヨウ・萩……と、一年中むせかえるような花の香が漂うこの寺は、鎌倉「花五山」のひとつで、鎌倉一の花の寺といわれる。なかでもハイライトは水仙と紅・白梅が時を同じくして庭を埋めつくす早春にある。嘉暦二年(三三七)七朝帝師夢窓国師は西の富士山を客山に、北の天台山を主山として禅院相應の勝地たるこの地に自ら瑞泉寺を開かれた。観音堂の裏の庭園は、草木を一切使わず、庭石もおかずして、裏山中腹の鎌倉石の岩盤をけずり、きざみ、庭の約束事である滝・池・中島等のすべてを巧みに配し、岩をえぐって橋をかけて岩庭とよぶにふさわしい庭園を作られた。この庭園は夢窓国師という優れた禅僧にしてはじめてなした禅庭である。鎌倉にある鎌倉期唯一の独自の意匠による彫刻的手法の庭園として国の名勝に指定されている。また五万坪に及ぶ広大な境内全域は往時の規模をよく保存され、伝えるものとして国の史跡の指定をうけている。

大行天皇の崩御に際し
日本郷友連盟会員一同
謹んで哀悼の意を表します

昭和六十四年一月七日

社団法人 日本郷友連盟

郷友目次(2月号)



巻頭言.....

中東の論理と心理.....

憲法改正に対する一考察.....

シビリヤン・コントロール.....

真の日本人(二).....

ゴルバチョフ軍縮提案が内に秘めたもの.....

軍事常識——北方領土.....

土光氏に学ぶもの.....

政治条約(INF)に惑わされるな.....

「サイレント・ミッション」(七).....

現代に見る間接侵略・革命(十).....

郷土の城(十九).....

自衛隊だより.....

新隊員の一日(113)(え・柏木康武).....

戦史物語——奇跡の生還.....

地方だより(熊本・兵庫・福島・東京・静岡・石川)
俳壇・歌壇・柳壇.....

郷友基金醸金者(芳名(通算47回)).....

編集後記.....

前川 清(3)

藤岡 武雄(17)

城田 賢一(18)

大塚 道廣(24)

斎藤 忠(28)

久松 公郎(32)

田藤 勉(34)

重野 義夫(35)

訳者・柏木 明(40)

狩野 信行(44)

佐々木信四郎(48)

新隊員(52)

牧野 良祥(54)

森松 俊夫(55)

俳壇・歌壇・柳壇(58)

郷友基金醸金者(61)

編集後記(67)

編集後記(68)

中東の論理と心理

——イラン・イラク戦争を含む

新中東情勢のマクロ的見方考え方——

前川清

(防衛研究所副所長)

まえがき(中洋の思想)

かつて、エジプトのナセル大統領は「中(近)東」という言葉を嫌い、代りに「西アジア」なる語を常用したという。

エジプト革命の立役者であり、一九五五―六五年代、第三世界の旗手として活躍したアラブの盟主エジプトの大統領にふさわしい話である。

「中東は中洋と呼ぶべきである」と主張したのは、わが国の中東研究の先駆者小林元博士である。

小林博士は、中東を西洋と東洋の中間に位置する第三の世界「中洋」として地位づけ、

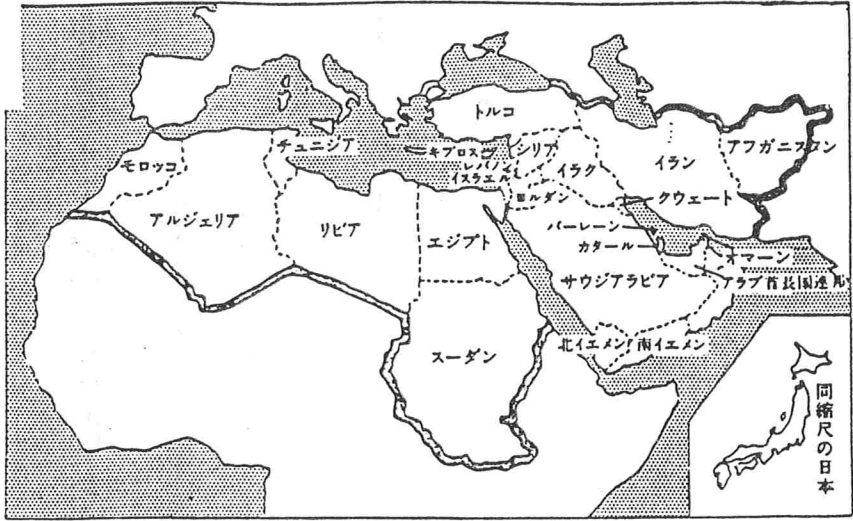
「そう呼ぶことにより、欧州を中心とする植民地主義時代

の中東観を改め、東洋や西洋と対等の立場で、中東の論理や心理を正しく理解することができる。そうすべきである」と主張し、「中洋」の名称を提唱した。

昭和初期、中東への関心も知識も低かった時代のことである。小林博士の提唱語「中洋」は、いまだ流布するにいたってはいいないが、世界における中東の地位や重要性を象徴するものとして、現代の中東を考えるにあたって示唆に富む主張である。

本稿は、初代エジプト防衛駐在官として、また、外務省中近東課(当時)に出身して、延べ五年余にわたり中東情勢と共に生き、現在もなにかと中東とのかかわり合いをもつ筆者が、「中東の論理と心理」の視点より、中東情勢をマクロ的に論じることを主目的としたもので、

中東の範囲と国々



(外務省中近東便覧)

「エジプトとサウジアラビアを中心とする中東のミクロ的考察」

「イラン・イラク戦争の特色と教訓」

「中東とわが国の安全保障」

とともに、わが中東研究の一部をなすものであるが、これらの所論が個人的なものであることはいうまでもない。

一、中東情勢の構造的変化

「中東には二つの大きな争地がある。

ひとつは中東地中海地域におけるアラブとイスラエルの争いであり、他は中東湾岸地域におけるイランとアラブの争いである。

今次、イランの革命とエジプト・イスラエルの和平成立により、中東の争いは湾岸地域にその重心が移るであろう」

イラン革命が「イスラム共和国の成立」の形で結実した一九七九年四月一日の夜、エジプトのサダト大統領が側近にもらした言葉である。

その半年前の七八年一月、サダト大統領はみずからイスラエルにのりこみ、「平和への奇襲」ともいふべきピース・イニシアティブ（和平攻勢）を仕掛け、和平交渉を主導し、イスラエルのベギン首相、米国のカーター大統領

と共にエジプト・イスラエルの和平実現に大きな役割を果した。

そして、その平和条約が締結されたのは、イラン共和国成立の丁度一ヶ月前の七九年三月である。サダトはさらに平和条約に言及し

「……、エジプト・イスラエルの平和条約を非難する国が中東の内外にすくなくない。しかし、彼らを含め世界の人々は、やがてエジプト・イスラエルの和平に感謝するようになるであろう。もしこの和平が成立しなかった場合、それは中東で二つの大戦争が今後同時に起る危険性を意味するからである」

と確信にみちた口調で側近に語ったという。

当時、筆者は初代エジプト防衛駐在官としてカイロに在勤中（七六年三月～七九年七月）であった。エジプト国防省情報局武官府の外国担当次長（M大佐）が奇しくも筆者のフランス陸軍大学留学時、クラスメートとして親しくしていた友人であったので、在勤間、彼よりサダト大統領の内話や身边雑話を聞く機会に恵まれた。

M大佐はサダト大統領と同郷（ミット・アブデル・コム地方）の出身で、遠縁ながらサダト・ファミリイに属し、いわゆるサダト側近の一人であった。

軍人出身のサダト大統領は、戦争記念日や各軍の創隊記

念日のパーティには夫妻で姿を見せ、外国武官と気軽に握手を言葉交わした。しかし、イスラエルとの平和条約の締結前後頃からは、不慮の事態をさけるためか、武官団の前にも姿を見せることはなくなったが、サダト大統領の言動については、イスラエル和平訪問のインサイド・ストーリーを含め、M大佐から色々興味深い話を聞く機会があった。

そのサダト大統領の内話のごとく、中東の争いは、その後、イラン革命の進展（七九〇）、ソ連のアフガニスタン侵攻（七九年一二月）、サウジアラビア東部油田地帯でのシーア派イスラム教徒の暴動やイスラム原理主義者たちによるメッカ事件（七九年一月のモスク占領事件）など次第に中東湾岸地域に移り、八〇年九月、遂に「新中東戦争」とも呼ぶべきイラン・イラク戦争が本格化し、中東は名実ともに「新中東情勢時代」に入るにいたった。

それまで中東問題とは、いわばアラブ・イスラエル紛争を意味した。ところが、七〇年代末期から、イランとアラブの争いにその焦点が移り、遂に、イラン・イラク戦争がぼつ発して長期化し、ペルシャ湾におけるタンカー戦争の激化と米ソ英仏等の海軍のプレゼンスの増大や米軍の介入で新中東戦争は名実ともに国際化するにいたった。

和戦の雄サダト大統領のイスラエル和平訪問から丁度一〇年目に当たる昨年一月中旬、アラブ緊急首脳会議がヨルダンで開かれ、エジプトのアラブ復帰の流れが本格化した。

イスラエルとの単独和平を「アラブの大義」や「パレスチナ問題の包括的解決」への裏切りとして、エジプトをボイコットして来たアラブ諸国のエジプトへの接近は、昨年末以降急速に進んでおり、エジプトのアラブ復権への背景には、アラブ・イスラエル紛争よりもイラン・イラク戦争を重視するアラブ諸国の思惑があり、湾岸アラブ諸国に対するイラン・イラク戦争の危険性の増大があり、エジプトの軍事力への期待がある。

それにしても、カザや西岸のイスラエル占領地区でのパレスチナ人たちの暴動が激化している昨今、「もし、いまだエジプトとイスラエルの平和条約が成立していなかったならば、それらをめぐりイスラエルとアラブ諸国との軍事的緊張がたかまり、イラン・イラク戦争と連動し、中東全体に大きな危険が訪れるであろう」と思うとき、エジプト・イスラエルの平和条約の価値とサダト大統領の先見の明を改めて実感するのである。

二、大國の中東介入の利害得失

「中東の紛争は大國の不当な介入によつては解決しない。しかし大國の適切な介入と調停なくしては解決しない」と名言したのは、チャーチルのあとを継いで英国首相になり、インドシナ戦争やスエズ戦争の停戦終結に活躍したイーデン卿である。その細部に関する言及はないが、中東紛争を象徴する含蓄にとんだ言葉である。卿の言わんとするところを筆者の中東体験をもつて補足敷衍すればおよそ次の通りで、それは現在のイラン・イラク戦争についてもいえることである。

「中東は且つて植民地化された歴史をもつ地域だけに、大國の介入や干渉はナシヨナリズムを刺激し、紛争を激化させる危険性をともなう」

「しかし、戦争終結の為には、名譽ある終戦、つまり国民に対する停戦の大義名分や口実、戦後の經濟復興の援助や賠償などの実利を引き出す必要があり、それらを可能にするのは大國の適切な介入や調停である。適切な介入により、戦争が一方的な勝利に終らぬよう巧みに操作し、痛み分けの形にすることが出来る。また有利な停戦条件をつくる為の陣取り合戦や攻防の悪循環を断ち切り、戦争の長期化を阻止出来る」

「さらに中東の国々には近代国家としての十分な機能に欠ける面があり、とくに戦争が長く続く場合、国家としての

統制力や当事者能力を失い、政府首脳が戦争を止めようにも、軍や国民が分裂してそれに従わず、レジスタンスやゲリラ戦の形で戦争が続く。また中東の社会は欧米や日本の如き高度な都市社会ではなく、いざとなれば砂漠の民として粗衣粗食に耐え、厚い信仰心にささえられた強靱さがある。

加うるに、面子（ワジウ）を重んじ、復讐を美德とし、損得を度外視してその実行をするイスラム教と砂漠の民の精神風土がある。

それだけに中東の戦争の終結には大国の適切な介入が適度に、それも交戦国が当事者能力をもっている間にタイミングよく行われる必要がある」

昨年七月、米国のワインバーガー国防長官は議会提出の報告書で、米海軍のペルシヤ湾でのプレゼンスの強化とくにクエートタンカーの護衛をさせる目的として、(1)ペルシヤ湾における西側諸国の海上航行の安全 (2)湾岸の中東穏健諸国の安全と安定 (3)ソ連の中東湾岸地域への進出阻止の三つを強調しているが、そのほかに、(4)イラン革命で西側不利に傾いた東西の政軍バランスの立てなおし、(5)イラク敗北型イ・イ戦争の終結の防止 (6)中東や西側諸国の米国に対する安全保障面の信頼性の維持確保 (7)大国介入型瀬戸際戦略の効果などの秘かな狙いが米国のペルシヤ湾介

入の中にあることは確かである。そしてこれら大国の中東への介入を余儀なくし、誘発するものは次に述べる「中東のもつ国際的インタレストや戦略的価値の重要性であり、さらにはその不安定性や危険性」にほかならない。

しかし、米国がペルシヤ湾における対イラン軍事介入（航空機や艦船等によるイランの軍事基地や兵力さらには石油等の工業基地の砲爆や港湾等の封鎖）を強化する場合、以下の如き各種デメリットが増す。

(1) 軍事介入が報復合戦の形でエスカレートする場合、前記米海軍のペルシヤ湾へのプレゼンスとその行動の「三つの目的」の達成が返って困難になる。

(2) 米国がイランの交戦国になる為、戦争終結調停において主導的役割をとるのに不利となる。

(3) イランその他による在外米人や施設へのテロやゲリラ行動を誘発する危険性がある。

反面、ペルシヤ湾やインド洋における適度のプレゼンスや適切な軍事介入は、湾岸有事の生起を抑止すると共に、有事の場合の効率的な軍事行動の準備や演練としてのメリットがある。

三、中東の国際的重要性と危険性

中東は自由陣営にとって「経済的安全保障の要域」であ

る。

将来、もし米ソ有事や欧州有事あるいは極東有事が起るとすれば、その発火点となる可能性の大きいところである。その背景には、中東が重要な国際的インタレストの所在地であるにもかかわらず、政治的に不安定で、中東の局地紛争が東西大國間の国際的紛争、あるいは欧州と極東の両地域さらには経済と軍事の両分野に連動する危険性の多重構造的的特色がある。

(1) 中東の国際的インタレスト

その第一は、いうまでもなく、世界の大産油地としての国際的価値である。

中東は近代國家の血液ともいふべき原油の多くを日本や欧米が依存している地域であり、西側經濟のエネルギー源の心臓部に相当する地域である。

一九八五年の統計が示すところ、世界に占める中東の原油埋蔵量は約六〇% (約六三〇億KL)、原油生産量は約二〇% (約六億KL)、原油輸出量は約三五% (約四二億KL) で金額にして約六七〇億ドルである。これら中東原油の總輸出量のうち日本向けが約三〇%、西欧向けが約四〇%、米国向けは約六%で、我国の中東(湾岸)原油の依存率は約六九% (但し、八六年度は約六〇%)、仏国は三三%、伊国は五一%、西独は一〇%、米国は六%の依存率

である。

これらの数字は、わが国や西欧主要國にとり、中東問題が何よりもまず石油問題であることを如実に物語っている。

(もつとも、八七年のわが国の石油輸入金額は二九四億ドル、輸入量にして一億八五〇〇KLで、總輸入額中の石油の比率は一九・七%となり、七三年以来一四年ぶりに二〇%を割り込み、八一年の四四%に比し大きく下つてはいるが、輸入品のうちトップの座にあることは変らない)

中東の国際的インタレストの第二は、そのオイルマネーゆえの大きな輸出市場、とりわけ世界の兵器市場としての重要性である。

一九八六年中東(二三ヶ國)の武器輸入総額は約一二〇億ドルで、それは第三世界の武器輸入総額(約二三〇億ドル)の約五五%、世界の武器輸入総額の三五%を占める。しかも、武器輸入総額の世界ベストテンの上位の大半は中東諸國が占めている。(八六年の場合イラク、イラン、サウジ、エジプト、リビア、シリア)

その中東への武器輸出國の第一位はソ連で八一〜八五年の五年間の総額約一八〇億ドル、第二位は米國の約一五〇億ドル、第三位は仏國の一三〇億ドル、第四位は英國の約四四億ドル、第五位は中國の四三億ドル、以下、西独の一五億

ドル、伊の一二億ドル、ポーランドとチェコの各々約七億ドルである。ここ一二年來、共產圏とくに中国、北鮮、東欧からイランへの武器輸出が増えているのが特色である。

〔SIPRI〕八七年及び八六年資料による。なお八六年度の武器輸出国ベネチアは省略)

第三の国際的インタレストは、中東の戦略地理学的な重要性にある。三大陸と二洋、二海を結ぶヨーロッパとアジアの接続部にあり、対ソ戦略態勢上、NATOとSEATOの中間に位置し、かつてのCENTO、あるいは将来におけるMETOとして、自由陣營の防衛上、重要な地域をなす。しかも、この中東地域には、スエズ運河をはじめ、ホルムズ、バブエルマンデブ、ボスボラスの各海峡など、海上交通の国際的要域や戦略的 choke point が集中している。

スエズ運河はアジアとヨーロッパの海上輸送距離を約六〇〇〇マイル短縮し、ホルムズ海峡は中東原油の六〇数%が通過する。しかもその半分は日本向けの原油である。

中東第四の国際的インタレストは、国連における大票田としての重要性である。

中東諸国とくにアラブ連盟諸国(一九ヶ国)が第三世界や非同盟諸国のキイ・グループとして国連で占める地位は

大きく、国連加盟国一五九ヶ国の五分の四(国の数にして一三〇ヶ国)にあたる第三世界の主要勢力として、そのアフリカ諸国への影響を含み、国連の票決に及ぼす中東諸国の影響は想像以上に大きいものがある。そして、その影響力の背後には、サウジなどアラブ産油国のオイル・マネーの威力と世界に五億数千万の信徒をもつイスラム教の結びつきがある。

(2) 中東の不安定性と危険性

注目すべきは、これら重要な国際的インタレストの所在地たる中東が、戦争や革命、クーデターやテロなど、ローカル・コンフリクト(局地紛争)の起り易い不安定な地域であるとともに、それら局地紛争に乗じて中東進出の拡大を狙うソ連、その阻止をはかる米国との角逐、さらには英独仏や中国・日本のかかわりあいなど「グローバル・コンフリクト(国際的紛争)」が密接に重なり合う地域であることである。

とくに中東湾岸地域が他の紛争地域と大きく異なる点は「経済と軍事」の両分野及び「極東と欧州」の両地域にまたがる国際的連動性と波及性にある。

つまり、中東での大戦争や大混乱は、石油の大半を中東に依存する極東の日本や韓国、欧州の仏独伊などの経済危

機をまねき、さらに政治社会的な不安定をもたらし、間接侵略と直接侵略の複合戦略を容易にする戦略環境を造る。

まさに、極東と欧州は中東の石油を通じて密接に、それも経済・軍事両面にわたり結びついており、それらリンケージの傾向は経済や防衛の国際的な相互依存性の増大とともに一層大きくなっている。

それだけに、将来、もし米ソ有事や欧州有事、極東有事がおこるとすれば、その誘発地域あるいは波及地域となる可能性が大きく、あるいはソ連が極東や欧州において、第一戦線もしくは第二戦線の形で「軍事的なリスク」をおかすとすれば、その可能性と必要性がともに大きいのが中東地域である。そしてその背景には、すでにのべた中東の国際的重要性と共に、イラン・イラク戦争の今後やホメイニ後のイランの動向、長期的には中東湾岸に集中するアラブ王制国あるいは首長国の運命がある。

当面、それらの国々はサウジアラビアをはじめ、一応安定しており、また「王制が革命により共和制に移ることは歴史の必然である」とは必ずしもいえないにしても、長期的視点からは革命の可能性は否定しえない。第二次大戦後、中東の王制国一四のうち六ヶ国が革命により共和制に移っている。即ちエジプト（五二年）イラク（五六年）北イエメン（六二年）リビア（六九年）、アフガニスタン（七

三年）イラン（七九年）であり、残るは湾岸六ヶ国と、モロッコ、ヨルダンである。

その中東は地理的にソ連と近く陸続きで、米国とは海を隔てて遙かに遠い。西側世界のリーダーとして米国が中東地域を重視し、平時からの経済・軍事援助とともに、イラン・イラク戦争にともなうペルシヤ湾の危機に対応して、軍事プレゼンスを増大し、タンカーを護衛し、限定的ながらイ・イ戦争に敢えて米国が軍事介入する理由には、以上述べて来たような中東地域の重要性和不安定性があり、東西のパワー・バランスを左右する中東の国際的影響性がある。米国の中東への軍事介入は局地的短期的視点にとらわれることなく、長期的かつ国際的視点に立つて論すべきものである。リビアやレバノンへの米国の軍事介入の功罪と単純比較すべきものではない。

また、ペルシヤ湾の安全航行に関する我国の対応問題は、単にペルシヤ湾の問題にとどまるものではなく、「経済の国際化に関連して我国が対応すべき新しい防衛問題」、すなわち「海外に増大しつつあるわが国民の生命や財産をどう守るか」を象徴するものであり、同時に「日本にとって防衛問題とはすべて日米問題である」ことを示唆するものであるが、それらに関する論考は別の機会にゆずる。

いづれにしても、「中東が西側世界にとって経済的安全

保障の要域であると共に、軍事的安全保障の要域である」ことをいみじくも知らしめているのがイラン・イラク戦争であり、ペルシャ湾問題である。

四、中東の論理と心理

「エジプトの砂漠はエジプトのラクダで渡れ」

「シリアの羊はシリアの犬で追え」

という意味のアラブの諺がある。

国連軍の首席調停官として永年にわたり中東で活躍したシーラスポーター中将がよく口にした諺である。同將軍とはカイロの国連軍事務所で食事をしながら時折懇談したが、彼は「中東問題を扱うにはまず中東の論理や心理をよく理解し、欧米の論理にとらわれないよう心がけることが大切である」と強調し、示唆に富むアラブの諺をよく引用した。

「争いの仲裁人は拳固の三分の二を覚悟すべきである」

「争いの仲裁人は金持ち力持ちでなければならぬ」

調停者として、敵対者を和解さすには、両者を相互に譲歩させることが必要であり、そのためにはアメとムチ、金と力が必要であるというわけである。シーラスポーター將軍の話は実務体験から来る説得力に富んでいる。

將軍の言う通り、中東問題を扱うに当っては、まず欧米

や日本の論理や心理にとらわれず、中東の異質な風土や歴史、社会や文化、戦争や平和の中から生れた中東の論理や心理、さらにはその生理を理解し、その特色と変化を知ることが必要である。

とりわけ、中東に最も多く石油を依存し、これからも中東と永く深くつき合っていかなければならない日本の場合とはとくにそうである。

(1) 中東の深層心理「誇りと屈辱」

中東の国々は古代文明やイスラム文明など過去の誇りと西欧諸国に植民地化された屈辱の心理がある。発展途上国の屈折したナシヨナリズムがある。欧米へのあこがれと警戒心、戦略資源たる石油の供給国としての強みと近代化の為に技術援助を受けねばならない弱みが共存している。それだけに軍事面は勿論、経済分野においても大国のオーバードレゼンス（過剰進出）やオーバードレゼンス（過剰介入）は相手のナシヨナリズムを刺激し、反発をまねく。革命前のイランにおける米国の場合がそうである。イランは古代ペルシャ帝国以来、植民地化される度合がすくなかったこともあり、誇りの高い民族である。

そのイランに革命をもたらせた背景には、パーレビ国王の独裁への反発と共に米国のオーバードレゼンスへの反感が重複かつ増幅し、大きなエネルギーを造り上げたと思われ

るところがすくなくない。

(2) 宗教の論理

中東は宗教が今も大きな力をもつ地域である。政治と宗教が未分離の地域であり、いまだ「宗教が戦争としての価値」をもつ地域である。

宗教の論理が生活や政治を支配し、しかもその殉教性と狂信性が今も根強く残っている。

面子（ワジュ）を重んじ、名譽の為には復讐を忘れず、しかも欧米的な論理や打算と異なる行動をする。いわゆる軍事バランスの優劣にとられず、勝敗を度外視して戦争を「始め、続ける」むきがある。

(3) 戦争と平和の論理

中東は第三世界の代表的な地域である。

発展途上国、戦後独立した被植民地国、非白人国、非同盟国、宗教が大きな力をもっている国、地下資源保有国など第三世界共通の特色をもつ国々の多い地域であり、そこには戦争や平和に関する異質な論理がある。先進国、とくに西側先進国においては、「戦争は（その威嚇をも含め）悪であり、害が多く、その利用価値も減少している」と考えるのが普通である。

平和こそ国家や民族に豊かさや自由をもたらしものである。しかし、第三世界においては必ずしもそうではない。

「先進国中心の国際秩序や体制を打破する実用手段として戦争は貴重な価値をもつ。国家の独立やネイション・ビルディング（建設）あるいは外国から経済援助を引き出す手段として、適度な戦争やテロリズムは価値があり、正義である」とする考え方がすくなくない。また、イランにとって「戦争は反革命を打破し革命を完成拡充する為の価値ある手段」でもある。それはペルシヤ湾におけるタンカー戦争や、テロリズムについても同様の意味をもつ。

(4) 建前と本音の使い分け

中東は「建前と本音」を巧みに使い分けるところである。とくにアラブの国がそうである。

建前とは共通の利益であり正義である。国益を超えて協力し共闘すべき「アラブの大義」であり、「表の論理」である。しかし「裏の論理」では、自国の利益を優先させる。口では建前をとえながら、行動は本音を追及する。原則論と現実論を上手に二元操作する。

もつとも、東洋風の義理人情を理解し、それを大切にするとところは、西洋よりも東洋にやや近いようである。

亡命後、アメリカにまで見捨てられたイランのパーレビ国王をサダト大統領はエジプトにかくまい最後まで面倒をみた。

第四次中東戦争後、エジプトの経済的貧窮を救ってもら

った恩義に報いたわけであるが、当時としては、大変な勇氣のいることであつた。

悲運のパーレビ国王がカイロ郊外マーディの軍事病院で他界したのは筆者のエジプト勤務も終りに近い頃であつた。

(5) 喜捨の論理と内股政策

元来、イスラム教には「富める者は貧しい者に金銭や物をほどこすべし」とする「喜捨(ザカート)の戒律」がある。救貧税(収入の数パーセント)ともいうべきものである。これは見方をかえて見れば「貧しい者(国)が富める者(国)より援助を受けるのは当然であり、富める者であれば誰から貰つてもかまわない。仮に相手が敵同志であっても、その両者から援助を受けることを気にしない」という考え方に通じる。外交用語でいうイーブン・ハンデイド・ポリシイ(内股膏藥的政策)である。もつともそれは中東に限らず、貧しい小国が東西両陣営の間に生きて行く知恵でもあり、政略でもある。したがつて、それに対する過敏な咎めだては得策でない。その国を敵方に追いやらない寛大さが必要である。(かつてエジプトをソ連に追いやった米国の潔癖性は危険である。大国の寛大さが大切である。)また、仮え援助をしたからとて、応分の感謝や報恩は余り期待しえない。すでにのべたように、欧米的なギブ・ア

ンド・テイクのメカニズムは中東では必ずしも通用しない。

(6) かけ値・引き値の論理

中東にはアラビア商人やペルシヤ商人そしてユダヤ商人の「かけ値と引き値の論理」が生きている。物の値段を含め「ものごとはバーゲニングや交渉によつて決めるべきである」とし、「その交渉は相互のかけ値と引き値の組合せにより進展する。同時にそれは意味疎通の大切な手段でもある」とする考え方である。中東における停戦交渉や和平交渉にもそれらの論理は生きている。交渉の戦術として常時活用される。

(7) 言葉は雲、行動は雨

(キヤラーム・ゴユーム、アマール・マタル)
「砂漠で我々が求めているのは雲でなく雨である。言葉ではなく行動であり実行である」という趣旨のアラブの諺がある。
アラブへの経済・技術援助の実行がおかれるとき、先進国の大使たちがアラブの首脳からよく聞かされる言葉である。

彼らは言葉は信用しない。「言葉は雲……」はそれを意味する。しかしアラブの世界ほどリップ・サービスの盛んな国はない。実行の可能性のすくないことでも、とりあえ

ず言葉では大いに協力の表明をする。言葉を行動の代りに多用する。

「口に出して言うことがまず大事である」

というアラブの諺のごとく、実行の可能性はともかく、まず言葉による積極的な意志の表明が大切である。そこでアラブで仕事をする場合

「日本の政府や企業のデイシイジョン・メイキング（意志決定）のプロセスは欧米のトップ・ダウン方式とちがひ、ボトム・アップ方式なので決定までの時間は多くかかる。しかし、一旦決定するとその実行は早い。それまでによく実行のつめがなされ、準備がされているからだ。欧米の場合とは逆である。トップの意志決定は早い。しかし実行開始までに時間がかかる。アラブ世界も同様である」と、あらかじめ、日本流の意志決定法の特徴をよく理解してもらう必要がある。

そうすれば「言葉は雲、行動は雨」という非難の諺をかかずともすむ。

(8) アラブのキーワード

初代の防衛駐在官としてカイロに赴任した筆者が、ときの国防大臣ガマシ將軍に表敬訪問をした折のことである。「アラビア語はどの程度知っているか」の問いに対し、離日前に、外務省のアラビスト（アラブ勤務のベテラン）の

友人が饒別代りに教えてくれたIBMを頭文字とするアラブのキーワード

I：インシャアラー（神のおぼしめしのまま）

B：ブクラ（あした）

M：マレーシュ（仕方がない）

の話をジョーク風に話したところ、第四次中東戦争の名前は苦笑しつつ「それらの言葉は外国人には理解しにくいものであるが、早くその真の意味が理解出来るようになってもらいたい。もっとも、それは中東勤務が終る頃になるかも知れないが」と言ったものである。三年半のわが中東生活でそれらの真の意味が理解出来たかどうかはわからない。しかし、それらがアラブの風土に合った便利なそしてアラブの論理や倫理の本質を示すキーワードであることだけは確かである。

ちなみに、「インシャアラー」（神のおぼしめしのままに）という肯定とも否定ともつかぬ返事用語は、アラブ生活を始めた者をまず困惑させる言葉であるが、「確約出来ないことへの第一段階の返事の表現」として、あるいは「相手を傷つけない為の婉曲な辞退や拒否の表現」として、まことに巧妙な言葉である。その曖昧さから来る誤解や曲解さえないように用心をしておけば、日常まことに便利な言葉であり、アラブの知恵が生んだ傑作の一つである

と思う。

「ブクラ」(あした)なる言葉は一見、アラブ人の約束期日を守らぬ時間的ルーズさの象徴の如くに思いがちである。しかし、アラブ世界の時間観念の異質さ、時間スケール(梯尺)の単位や精度のちがいが、さらには砂漠の世界の時間感覚の特性を理解すれば、一概に非難出来ぬ面がある。良くいえばアラブの楽天主義と善意が生んだ言葉の知恵である。

そして「マレーシュ」(仕方ない)とは人間の力や知恵ではどうしようもない厳しい自然や社会の中に生きるものの「達観の思想」ともいふべきものであろうか。

(9) 論理なき中東の論理

「中東には倫理はあるが論理はない」したがって「中東で首尾一貫し辻褃のあった話には用心せよ。それは間違いか作り話である」とアドバイスしてくれたのは、中東生活の永い某商社の支店長である。

そこで、アラブ世界で仕事をするには「あせらず、あてにせず、あきらめず」の「三あ主義の精神」つまり「おおらかさと自力主義と忍耐」が大切であるということになる。

中東は複雑怪奇、有為転変、砂嵐流砂の世界である。

「人間の洞察力に限界のあることをいつも思い知らされるのが中東問題である」

とはキッシンジャー元国務長官の述懐である。

第四次中東戦争の前後を含め、米国務長官として中東の和戦に深くかわり合い、停戦調停や兵力分離協定、そしてエジプト・イスラエルの和平の為に精力的なシャトル外交を展開し、あざやかな手腕をみせたユダヤ系米国人キッシンジャー氏にしてこの言葉ありきである。

そのキッシンジャー氏は中東和平交渉において「ステツプ・バイ・ステツプ方式」と「瀬戸際戦略」を巧みに使用した。包括的一挙解決法でなく、単独和平など部分的解決を段階的に積み重ねて行く方法により、紛争をとりまく環境や状況を逐次変化させ、有利な流れを造って行くやり方である。

後者の瀬戸際戦略は「中東のカケヒキの論理」を逆手にとった調停法で、紛争当事国を和戦の岐路にまで追い込み、あるいはエスカレートさせ、「戦争か平和か」の二者択一を迫って相互の譲歩と妥協を引き出す方法である。

「中東の紛争が解決されるには何よりも多くの時間がかかっているのは、ユダヤ系の元フランス首相で中東問題に関係が深かったマンデス・フランス氏である。」

「かつて、独仏の和解には多くの歳月が必要だったが、中東紛争は宗教問題がからむだけにそれ以上の時間が必要である。双方の不信感と猜疑心を消し去る時間の流れと世代の交代が必要である」と。

これにはイラン・イラク戦争についても同様であるといえる。

あとがき

中東と仕事の上でかわり合った五年間のうちに、エジプトを拠点として中東の大半の国々を訪れた。やむなき事情のため、アルジェリアやモロッコなどのいわゆるマグルブ（北アフリカ）中東は訪れることはできなかったが、東の湾岸中東や紅海中東地域は、イラン・イラクやサウジアラビアをはじめ、南北イエメン・エチオピア・ソマリアにも各々約一週間にわたり滞在し、サウジとイスラエルには三度訪問した。

それらを通じて実感したことは、中東世界やアラブ世界といってもそれぞれに特色があり、一概に論じえないことである。

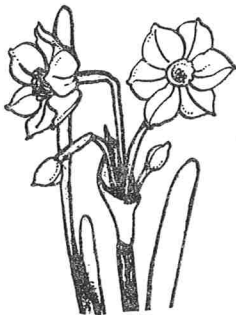
中東の砂漠にも海洋砂漠あり、山岳砂漠があり、土漠あり、また戦車が機動出来る砂漠とそうでない砂漠など、地形的にも多様である。

政体上も王制国と非王制国、宗教上と言語上の区分から、アラブと非アラブ国、宗教上イスラムと非イスラム（ユダヤ教・キリスト教・ギリシヤ正教など）、石油に關し産油国と非産油国、経済体制上、共産主義・社会主義・資本主義、そして兵器依存を含む軍事外交上も親米国・親欧国・親ソ国・親中国・親日国など複雑多様であり、総論化はしにくい。

本稿の「中東の論理と心理」は、それら中東のミクロ的な多様性を知りつつ、「西洋や東洋の論理と心理」との違いをイスラム諸国を中心にマクロ的に論じたもので、個々の国々により、程度の差や例外のあることは言うまでもない。

（現代の安全保障・六〇より転載）

（詐）本記事は昭和六十三年の記述である。



提言

憲法改正に対する一考察

藤岡武雄
(愛宕郷友会副会長)

郷友九月号に憲法改正試案が発表され其の内容は概ね妥当なものと思われるが、一つ重要な点が脱落して居る。それは憲法第九条第二項後段の規定「国の交戦権はこれを認めない」の点に一言も触れて居ないことは改正案としては誠に不合理であつて交戦権を否認した国は世界中一国もない現状である。

一、交戦権とは何か。

交戦権とは宣戦布告をする権利と普通思われ勝ちであるがそうではなく、率直に云えば軍隊の活動権なのである。即ち戦闘行為権であり、自衛権行使の為の権利である。敵を殺傷し、敵地を占領し、敵性物件を破壊又捕獲する等の行為を正常化するものである。

元来敵と云う概念は交戦権から発生するもので、戦時平時を問わない。若し交戦権がなければ之等の行為は海賊行為になり、強盗行為となるのである。

二、交戦権は自衛隊の活動権である。

交戦権がなければ自衛隊は有事の際活動することが出来ない。又敵と云う概念がなければ平素の訓練も不可能である。

有事立法の必要を論ずる者もあるが、有事立法では森羅万象千変万化の事態に対応することは到底出来るものではない。

○英国とアルゼンチンのフォークランド紛争

○ソ連の大韓国民間機撃墜事件

○米国のイラン民間機撃墜事件

○イラクのジャパンイラン石油会社の爆撃

○イランの中立国船舶の爆撃

○米国のベトナム出兵及びソ連のアフガン侵入事件

等過去幾多の事件は何れも交戦権により之が正当化されて居るのである。

三、パリ平和条約

一九二八年有名なパリ平和条約が締結され、日、米、

英、仏、伊、独等十数ヶ国は永久的な戦争放棄を誓ったのであるが、其の際に於ても交戦権は否定されなかつたのである。

戦争を放棄すれば交戦権は必要がないとの論もあるが戦争と交戦権とは別の問題である。交戦権は自衛権行使の為の国家固有の権利であつて之を否定することは出来ない。

シビリヤン・コントロール

(CIVILIAN CONTROL)

今だにこの言葉がやや不消化のまま単に背広を着た内局の文官と制服を着た自衛官の対立との視点でとらえられているやに見える。

クラウゼウイツは戦争論の中で、政治と軍事の關係について次の様に考察している。「戦争とは他の手段を以つてする政治なり」続いて、「政治の方向及び意図をして、これ等の手段と矛盾せしめざらんとするは、一般に兵学が要求し得る権利であり、……中略……政治的意図は目的であつて、戦争は手段である。未だ曾て目的なき手段はあり得

四、結論

交戦権のない国家は自からが自分の手足を縄で縛つて居る様なもので半身不随意である。自衛隊は有名無実の存在となり有事に際し充分な活動が出来ないことは明白である。

憲法第九条第二項後段の規定は速やかに削除されるべきものである。

城田賢一

(静岡県支部相談役)

ない。「かくて戦争の様相は政治の目的と使用される暴力の程度により、より戦争らしい戦争と、いよいよ戦争らしくない、政治らしい戦争になってゆく。」「そこで軍隊を死地に投ずる将帥の責任は益々重大なものになる。」と論じている。

第二次大戦後朝鮮戦争を境として、超大国間の軍事的、政治的均衡が一時的に保たれ、その後均衡の不安定な地域に紛争や熱い代理戦争が限りなく、発生している。それは戦争論に云う所の他の手段をもつてする政治に過ぎない。

規模の大小は、政治目的の大小、或いは国民的（民族的）関心度の大小を示す尺度でもあろう。

敗戦を経験した我々は、同じく第一次大戦に於て帝政下
イツ陸軍の崩壊を経験し、ワイマールドイツ国軍を再建し
た、フォン・ゼークト將軍の「一軍人の思想」の一節が今
再び思い起さるのである。「政治家と軍人は常に緊密にし
て互に深い信頼と、密接な協力を必要とする。永久平和が
保証されぬ限り、外交は自国ならびに諸外国の軍事を常
に考慮に入れなければならないであろう。たとえある国の
政治が如何に平和的な目的を追求するにしても、政治家は
その計画を遂行するに當つて、最後の手段を強力な軍に俟
つのである。政治家が如何なる程度まで、その要求を貫徹
しうるか、或いは他国からの要求を甘んじて受け入れなけ
ればならないかということは、軍の威力の如何によつて決
定されるであらう。そこで政治家は、將帥に向つて、君は
何をなしうるのか、又相手国は、何をなしうるかと問う。
それに対して將帥は、政治家に、君は何を欲するのか。又
相手は何を欲するのか。と反問する。この様な意見の交換
によつて、政治家は軍事を、いかなる程度まで政治的活
動に使用しうるか、という認識を持ちうるのであるし、又
將帥の方は、如何なる方向に軍備の完成を期すべきか、と
いう指標を掴むことができるのだ。一國の国土を保全する

という問題は第一に政治的な問題である。外交の任務はま
ず戦争の脅威が現実することを極力回避し、これを条約に
よつて防止するにつとめ、又実際に攻撃が行なわれた場合
には、友邦国を確保するにある。このようにして、遂に戦
争が開始された場合には、外交はすでになすべきことを完
了して、あとう限り有利な条件のもとに戦争ができるよう
な事態が展開していなければならない。將帥の方はいずれ
の方面の国境が最も脅威をうけていると考へなければなら
ないのか、いづれの隣国が非友好的であるか、何れの国が
友好的であり、戦争の場合、その援助を確実に期待し得る
か、という問題をすでに解決している筈である。しかし將
帥は、その基礎となる指令を政治家に仰がなければならな
い。……」。

フォン、ゼークト將軍のことは今改めて重々しく我々
の胸に迫るのである。終戦後の一頃東洋のスイスになれ
と、あこがれた平和のシンボル・スイスも、国民皆兵の嚴
しい現状が知れ渡ると、今や、日本人の誰も見向きもしな
い。そのスイスが、第二次大戦中完全に中立を維持し、そ
の百五十年に亘る光榮ある平和を守り通したのである。六
年の間四周を世界最強のナチス軍に包圍されながら敢然と
抵抗し、その独立を守つたのである。その中心にあつたの
は、アンリ・ギザン（HENRI GUISAN）將軍で

あつた。第二次大戦の第二年目昭和十五年六月フランス軍がドイツ軍の電撃作戦により崩壊し、イタリヤも参戦し、スイスは完全に包囲された。国内は、敗北主義者や日和見主義それにナチスの賛美者で、混乱に陥らんとしていた。

この危機に際してギザン將軍は躊躇なく国境陣地を捨て持久戦略に転じた。スイス軍は、ゴダール要塞を核とする「砦陣地」に立て籠つたのである。それは最悪の場合、国土の内平地の大部分と国民の五分の四の生命財産を敵手に委ねることを意味していた。愛する妻子と墳墓の地を残して、遠く雪のアルプスにその陣地を移す將軍の心中は如何なるものであつたらうか。又將軍のこの決心を支持し、支援した、スイス連邦政府とスイス国軍との羨しいこの信頼関係は何によるものであらうか。將軍が作戰計画変更の承認を求める為政府に提出した覚書が残っている。

「……我々の今後の国土防衛の目的と根拠は、隣接する国々に『スイスとの戦争は必ず永びき多額の費用の無駄使いになる冒険であり、しかもその結果は、ヨーロッパの中心部に、無益で何時までもくすぶり続ける戦場を残すのがおちである』ことを示すことに終始一貫して置くべきである。我々は戦争を避けたいと思えば、我々の皮膚―国境―を最も高価なものにすべきである。……」国民に大なる犠牲を強いてまでも守るべき崇高な国家目的を示し、軍隊の

指揮官に対しては、作戰計画にまでそれを浸透させるスイスの伝統と精神をここに見るのである。

以上外国の例を引いたのであるが、日本が初めて近代戦を戦つた日露戦争は如何であつたらうか。勿論、政府と陸海軍首脳との肝胆相照す緊密な理解と協力、殊に戦争終結についての見事に呼吸の合つた処理は、外国からも高く評価されている。勿論、陸海將兵の流した尊い血とその勇戦奮闘があつてのことではあるが。ここで政戦両略の見事な一致をふり返つて見よう。時の参謀総長の上奏文。「……朝鮮問題解決のこと賢明なる内閣諸君において夙に成算あらん。我輩軍人、もとより政治に容喙すべきにあらず。又あえてこれを欲せず。しかれども国防のことはかるは、我輩本然の責任にして国防の計画及び彼我兵力の関係上、朝鮮殊に露国に対して拱手黙視する能わざるものあり。云々」そして、いよいよ三十七年一月十二日御前会議に於て国交断絶案を上呈するという政府側の決心確定を見た上で参謀総長は上奏文を奉呈したのである。「……戦争にあらざれば時局の解決は望む能わずとの決心をとりたる今日、もしわが政府なお在再決するところなくんば、いたずらに彼の術中におち入り、又挽回すべからざるの勢いを馴致するに至らん。時局の解決、戦争をさくるあたわずとせば、その発動の機は専ら戦略上の利害に基き決定せざるべから

ず。これ政略と戰略の合同一致すべき最大緊要の急務なり。この儀刻下の危急にのぞみ黙過すべからざる事と存じられ候間、別冊露軍に関する状況判断を具しつつしんで上聞す」かくして二月五日国交断絶、六日いよいよ連合艦隊が出征することになった。

明けて明治三十八年三月十日奉天會戦が終るとすぐ大山満洲軍總司令官は大本營に対し重大なる意見具申を行い、大本營はこれを三月十三日夜に受け取っている。「奉天戰勝後における戰略は特にわが政策と一致するを要す。即ちますます進んで敵を急追すべきか、はたまた持久作戰の方針をとるべきかは、一に政策と一致するに非ざれば、幾万の生命を賭して遂行せらるべき戦闘も無意義、無結果に終るべし。わが満洲軍の任務は敵を遠く満洲より撃攘するにあり、故にこの大任務を達成するためには、尙敵を急追せざるべからず。然れどもわが政策にして、これを伴わざる時は、この懸軍長驅も畢竟無用の運動たるに過ぎず。もし政策にしてこれに伴う時は黒龍江岸まで前進するとも敢えて辞せざるなり云々」日露戦争は戰略によつては終結できない、緒戦において勝つた後政略の力で解決するのだ、という既定方針に基き万般の施策が講じられたことは戦史に詳しい。アメリカのローズベルトが「自分はまるで日本外務省の官吏のようなものだ」と冗談をいいながら和議の仲

介に走り廻ったことはよく知られている。

満洲事變・支那事變、大東亞戦争と引き続く永かった大戦争も昭和二十年八月の終戦と共に連合軍による占領を迎えることになった。侵略国として懲罰の為、平和憲法と称するものを押しつけられ、「義に懲りて膺を吹く」如く、国防又は愛国心に関することは、一切タブーとして、いまだに年間三兆円をも超す予算審議のみに明けられている。自衛隊最高指揮官の総理大臣は釣り舟の遭難者の合同葬儀にはお伴を引き連れてのお詣り、おまけに、天皇皇后両陛下の花輪も添えて。防衛庁長官に到つては、事故の原因調査もすまぬ内から、周章狼狽「悪うございました。責任をとつて辞めます云々、国家の安危に関する重要な機関の責任者として、その責務を日夜負うべき長官の態度であろうか」

シビリヤン・コントロールは如何なる時点で光輝を発すべきものであるうか。一国の軍隊の精銳さは、その政府及び国民精神の投影に過ぎない。精銳な軍隊とは、常に高い政治目的に対し、それを達成しようとする意慾に燃え常に、研鑽努力したその成果を見るのでなければならぬ。

以上政治と軍事、要約すれば、シビリヤン・コントロールの在り方について概観したのであるが、そのコントロールが有効に作用する為には、広い国民的合意と高い政治理

念、それに政治家と防衛担当者の強い相互信頼が不可欠であることを見た。その何れの一つが欠けても成り立ち得ないように見える。懲罰憲法と、強大なる米覇権下にあつて、何をなし得るのか、又なすべきであろうか。正常なシビリヤン・コントロールを求める方が又無理なのではあるまいか。最後にスイス連邦政府が国民全部に配布した「民間防衛」(ZIVILVERTEIDIGUNG)のまえがきの一部を紹介したい。本文は約三百頁のものである。

「国土の防衛は、わがスイスに昔から伝わっている伝統であり、我が連邦の存在、そのものにかかわるものです。その為武器をとりうるすべての国民によつて組織され、近代戦用に装備された強力な軍のみが、侵略者の意図をくじき得るのであり、これによつてわれわれにとつて最も大きな財産である自由と独立が保証されるのです。……中略……致命的な他からの急襲を避けるためには、今日からあらゆる処置をとらねばなりません。……以下略」

本文は相等シヨッキングな内容を含んでいます。が本然の国家観念を忘れ、アメリカ一辺倒により自立を忘れた日本人には一読すべき価値があると思う。(63・8・8)



(広瀬ふみ子先生画)
日本水彩画展入選作家)

今上天皇陛下の御聖徳

矢野 正俊

(熊本県支部会長)

聖なる夜景

月なく星も稀れな夜空の下、黙々と鹿児島灣を南下する軍艦榛名のうす暗き後甲板は、人なく声なく只ひとり陛下のおん挙手の尊影を仰ぐ、御会釈を賜わる者は、そも誰か。肉眼にこれを求めて之を得ず、わずかに望遠鏡のレンズのうち薩摩半島沿岸一帯はるかに見ゆる奉送のともし火。盛んなる哉山々には篝火、岸边には ちようちんの群、延々として果てしなく、

さらば陛下よ、おんすこやかに、

おかえりませ。

ありがとう、皆も元気でね、

げに闇をも貫ぬくは、まごころの通い路、海波遠くへだてて君民無言のわかれのかたらいああ誰か邦家万古の伝統を想わざる。

時はこれ昭和六年十一月十九日、

当時後甲板上で、たまたま此の光景を拝した供奉の一人

木下道雄[㊦]

郷友連盟の理念

(昭和五十三年三月総会決定)

わが国の歴史と伝統を尊び、愛国心を高め、郷土の繁栄、日本の安全を図り、世界の平和に寄与する。このため

- 一 私たちは立派な日本人としての修養につとめよう。
- 一 私たちは天皇を中心として全国民の団結を固めよう。
- 一 私たちは道徳を重んじ、公共に尽くし、国民の義務を果たそう。
- 一 私たちは国や社会の秩序正しい進歩を図ろう。
- 一 私たちは力を合わせて郷土を、日本を守ろう。

眞の日本人(二)

大塚道廣

(大洲陶器株式会社
航少候 23期)

——精神の国日本の真髓を
世界に伝えんとした内村鑑三——

国民の道徳思想の改革

「道徳は財産の如きものなり、其実行となつて世にあらはるるは、永き修養と蘊蓄(うんちく)との後にあり。

朝に道を聞きて夕に之を行うが如き道徳家は、其日稼ぎの日雇と顔を同うするものなり。国民の道徳心亦然り、之に數百年に渉る修養ありて、始めて偉大なる事業は出来得るなり。国民にして已に其道徳的潜勢力を消費し去りしとせん乎、憂國家の煩悶も改革家の熱情も之を如何ともする能はず。世に慘憺の極と称すべき者は、その道徳を消費し去りし國家にぞある。」

世の悪を見、その罪をつくことに疲れた鑑三は、社会風俗その他もろもろの事象に眼をむけつつも、心はどこか遠く深く沈んだところがある。それは、国民の道徳を、つま

り国民の思想を改革しなければ、社会はよくなるならぬ、と確信しているからである。

もともと日本人は「義理を重んじるが、義務を重んじない。」だから「家族的道徳」はあるが「國家的道徳」はない。そこにあるのは、私的で情的な倫理であり、それは西洋の公約にして理的倫理によつて修正されるべきである。薩長政府の不公平は「義理」にしばられるところからくるのであり、北条幕府の公平は「義務」を重んじるところからきた、と鑑三は考えていた。

「日本人の倫理なるものは概ね個人的たりしなり、君に對しては忠、父母に對しては孝、兄に對しては悌、夫に對しては貞を説きしも、社会てふ公的集合体に対する義務なるものを教へざりしなり。日本今日の要する改革

は、政治又は文学又は社交等一部の改革にあらざるなり。日本今日の要する改革は、思想の改革なり、即ち父母に對する思想の改革、夫に對する、妻に對する、兄に對する、弟に對する、僕と婢に對する、友と隣人とに對する、一言にして蔽へば人に對する思想の改革なり。」また他のところではこのようにも言っている。

「根本的改革は、国民の宇宙觀拜（かんへい）に人生觀の革まるより来るなり、故に是れ詩人、哲學者、道德家、拜に宗教家の事業にして、政治家の事業にあらず、伊侯隈伯、A党B党より根本的改革を望みつつある日本人は、終に全く失望せざるを得ず」

このように鑑三のめざしたものは国民思想の改革である。それがため鑑三は次のように七項目をあげて、具体的な改革案を提示している。これは、彼の人格主義的な立場から、社会と国民の根本的な改革をねがう真に強烈な心情から発したものであるといえよう。

「余輩の欲する改革」

- 一、軍備を縮少して教育を拡張する事
- 一、華土族平民の制を廢して、総て日本市民（シツズン）と称する事
- 一、軍人を除く外は、位勲の制を全廢する事
- 一、府県知事郡長を民選となし、完全なる自治制を地方

に施す事

- 一、政治的權利より金銭的制限を取り除く事
- 一、上院を改造し、平議以下の者をして其議員たるを得ざらしむる事

一、藩閥政府の余孽（よげつ）を掃蕩する事

以上は卓抜した民主主義の基本であり、現代日本の民主主義政治の中にある悪蔽を取り除くためにも的確なる施政指針であり、大いに参考とし戒杖とすべきであると思う。

信仰とは正義を信じ正直其物

鑑三は、祖国の背負う歴史的使命の如何に重大であるかを身をもつて体得し、社会改善の可能性を強烈に訴えている。

「信仰とは必ずしも神又は仏を信ずるの謂ひにあらず、最も肝要なる信仰は正直其物の信仰なり、即ち正義を正義として信ずる事なり……神を信ずると称して方策を信じ、仏を信ずると称して政權に頼るが如きは虚像の最も甚だしきものなり、日本の社会は腐敗せりとは、今や何人も唱ふる所なり、然れども、余輩の目撃する所を以てすれば、腐敗は多く其上層に止まりて未だ全く其下層に及ばず。腐敗せるは俗吏社会なり、政治家社会なり、教育家社会なり、紳士縮商（しんしょう）の社会なり、華族社会なり……日本国は、実に慚愧に堪へざる国なり。

……幸なるかな彼等は日本国民の最少部分なり、樞樓（らんる）を纏ふて泥土の中に稲苗を植うる千百万の日本農夫は、私生児を設くること稀にして且つ甚だ寡欲、廉直、隣人に篤くして恥を知るの民なり……家庭の最も清浄なるは、資本家にあらずして労働者の家にあり。勿論上の為す所下是に習う我國の風習よりして、上層社会の腐敗は延ひて国民全体に互りし事は疑ふべからざるも、而も腐敗死を致すの状は、貴族紳縉の社会に止まるを知らば、吾人に大なる慰藉なき能はず」と。

世界の大勢に切実な關心をよせていた鑑三は「人類全体の救済を祈ればなり。日本は終に日本人を以て救ふ能はず、是れ悲しむべくして而も亦否むべからざる事実とす」。このように常に大局の見地に立ち、近代日本改革のための先駆者として社会悪の温床に鋭いメスを入れ、清浄化への道に生を賭け、その必要性を説き訴え続けてきた気鋭の士であり、強烈な道義魂の持主でもあったと思える。

偉大なる事業とは純潔なる生涯

「東京独立雑誌」では人格主義的立場からする歴史観と社会観に徹し、徳を人性の最高所におき、世の俗化を憂う切々たる心情を吐露している。

「然れども噫、偉人、偉大なる人は何処にかある、徳は努めずして彼より流れ来り、彼に欠点あるも彼の志望の

広且つ大なるが故に、海が海底の凹凸を蔽ふが如く能く之を蔽ひ、山に其深罅孔隙（しんかこうげき）あるが如く反て美なり。彼に嬰兒の純潔なる心ありて、古老の思慮と先見とあり。彼の同情は世界を懐き、彼の志望は造化の真意と合す。故に彼の為すところとして偉大ならざるはなし、彼の語るところとして真理ならざるはなし。国に処しては遠望宏量正大の政治家、家に処しては柔らかなる夫と父、細事を以て細と為さず、大事に処して踏まず、涙脆くして勇ましく、富豪権門を後にして寡婦孤児を先にし、弱なるも正なる者を恐れ、強なるも不正なる者を挫き、智識を貴ぶも之に誇らず、徳を人性の最高所に置き、万事を判（さば）くに凡て徳教の神聖なる公道よりす。噫、斯の如き人、偉人、君子の宏量偉大なる者、智者に深厚計り難きの道徳的觀念を与へし者、無限の慈悲心を蓄へたる武人、俗人の正反対、噫、斯の如きの人は蜻蜒洲中何処にかある」

さらに、

「悪は逐いて去るものにあらず、悪を去らんと欲せば善を求むるに如かず、改革は消極的事业にあらずして積極的事业なり。仁愛を供せよ、然らば怨恨は去るべし。純潔を供せよ、然らば汚濁は去るべし。天は一度怒りて百度恵むにあらずや、天意を行はんと欲するものは、蓋し

此如くならざるべからず。

偉大なる事業は著述にあらず、政治にあらず、実業にあらず、海陸軍の殺伐的事业にあらざるは勿論なり。偉大なる事業は純潔なる生涯なり、他人の利益を先にして自己の利益を後にするの生涯なり、己れに足るを知りて外に求めざるの生涯なり、ソロモン曰く『己れの心を治むる者は城を攻め取る者に愈（まさ）る』と。」

このように鑑三は、一徹に所信を貫かんと欲し、熱切に理想を追求し、その真理に如何に従順であったかが察せられる。鑑三の信仰を通じての愛国の至情と、興国への道、道徳復興への悲壮な願いは「興国史談」にある次のことばで十分汲みとることができる。

「我々日本人は亡びてはならない、それだから我々は真面目に心を静かにして興国の理由と現象とを研究しなければならぬ、我々は我々の国を興すことが出来る、我々は我々の日本を世界第一の国となすことが出来る、我々は亡国の悲運に沈むの必要はない、我々が興国史研究の必要を認むるのは此の故である」

また鑑三は正義の士であるとともに、家庭にあつては情愛の人であつたことは当初申し上げた通りである。「あるいは語り、あるいは怒り、悲しみ、ほほえみ、沈思し、爆笑しなどなど、すべて異なる表情と姿態とをそなえた父が

異常な迫力をもって眼底に映る」これは鑑三長男夫妻の真実の言葉であるが、ここではこの面についての詳細を省略させていただく。

人を賞賛し得る人は、その人と同等もしくはそれ以上の人物であろうことは世の道理である。「天は信ずる者の言を信ず」の言葉の通りであり、真に人たるべき人であるといえよう。

巻頭において述べた通り、精神の国日本の真髄を世界に伝えんとして代表的日本人五名を紹介して国際的にも大きな反響を呼び起しこの書の発端ともなるべき人、この人こそ正に内村鑑三その人であり、如何に偉大なる人物であつたか、当時と一部相似した現代の世相に照し合わせその心情察するに余りあり、敬尚の念新たなるものがある。

主題である尊徳、藤村については追つて詳述の通りであるが、残る三名は如何なる人物であつたか、西郷隆盛、上杉鷹山、日蓮についてその要点を摘出して参考としたい。

(つづく)





ゴルバチョフ軍縮提案 が内に秘めたもの

齋藤

忠ちゆう

（国際政治・軍事評論家
日本を守る会代表委員）
連盟顧問（問）

国連総会におけるゴルバ チョフ書記長の演説

昨年十二月七日のことである。ソ連共産党書記長兼最高会議幹部会議長ゴルバチョフが、アメリカ合衆国ニューヨーク市で催されていた国際連合第四十三回総会の議場で、この人としては初めて一場の演説を行なった。およそ一時間ほどの、かなり長い演説であった。

そもそもソ連の最高指導者が国際連合総会の場で演説を行なうこと自体、今日までは殆ど在り得なかつたことなのである。

ニキタ・フルシチョフの国連演説が行なわれたのは、一九五九年および六〇年。その時から、すでに三十年に近い歳月が過ぎ去っているのだが、——そのあいだ、ソ連最高指導者が国連総会で演説を行なったことは遂に無かつたのだ。

それほど珍らしいことであつたばかりではない。世界を驚かしたのは、その演説の主旨であつた。

「わがソヴィエト社会主義共和国は、今日以後二カ年のあいだに、五十万の兵力を一方的に削減いたします」と言うのである。これは、今日までの軍縮の歴史においても、嘗て例を見ぬ決定であると言わなければならない。

ソ連自身の軍縮

具休案内容

ゴルバチョフ書記長は、開口一番、なによりも、まず、「平和と安全に貢献する国際連合の役割」を強調した。

「軍事力の行使や脅迫は、外交の手段とはなり得ないし、また、なつてはならない。わけても、核兵器に就いて、然りと言えましよう。国家は、軍事力を増強することによつて全能とはなれませぬ。却つて、逆に、軍事力への依存は、国家の安全保障の弱体化を招くことになりましよう。」

……」

「資本主義体制たると、社会主義体制たるとを問わず、社会の発展は多面的であります。たがいに相手の考えを、また立場を尊重しなければなりません。国家関係の非イデオロギー化を承認すべきでございます。」その立場において「国際関係の正常かつ建設的な改革」を可能ならしめ得る対話の必要を強調しているのだ。

それに続いて彼が明らかにしたソ連自身の軍縮具体案が、さきに述べた五十万兵力の一方的削減の宣言であったのである。

更に、また、ワルシャワ条約機構諸国との合意によつて、一九九一年までに、東ドイツ、チェコスロヴァキアおよびハンガリアから六個師団の戦車部隊を引き上げ、解散せしめること。右の三国に駐留しつつある降下渡河部隊を含む降下急襲部隊その他の部隊を、五千輛の戦車とともに撤退せしめることを明らかにしているのだ。

心を落ち着けてその

軍縮提案の内容を見よ

確かに、人類世界の安全と平和を考える場合、なによりも問題となるものは、常に、ソヴェエト社会主義共和国連邦という共産主義国家の悪魔的なまでに巨大な軍事力であ

り、わけても、北大西洋条約機構軍のその三倍を超える空前の通常兵力であらねばならない。

ところが、その通常兵力のうちの五十万を、「一方的に」削減するというのだ。しかも「今日以後二カ年のあいだ」という明確な期限まで添えて。

心を落着けて、その余りにも善意的な声明の背後に潜む真実の意図を深く考えてみる余裕などが在ろうはずは在るまい。ゴルバチョフのこのたびの意表外の声明に我を忘れて狂喜し、喝采する人々が多いことも、もとより、当然の上にも当然と言えるかも知れないのだ。

だが、同時に、その誘いに踊り上がって飛び付いてゆくことも、あまりにも早計の所業と言うべきであろう。そもそも、今日まで、ソ連という国ほど、数々の軍縮提案を乱発し、それをひたすらに自国に有利に利用した国家が在ったか？ まして、その一つ一つを心を落ち着けて見直してみるのがよい。多くは、実行不可能の詐欺的誘い掛けであったことに気付くであろう。

二十九年前の痛恨の

体験

通常兵力一方的削減の誘い掛けにしても、今回だけのことではないのである。百二十万の兵力を一方的に放棄する

という提案は、既に、二十九年前の一九六〇年にも行なわれている。ただ、世界の諸国が殆どこれを問題にしなかつただけだ。

あたかも、その時期に、わが日本は、アメリカ合衆国との間に、安全保障条約改定の交渉を必死に進めつつあった。

私自身も、その時期には、講和成立後、学界と論壇に復帰、英字紙「ジャパン・タイムズ」の論説主幹として、また「安全保障国民会議」の議長として、その動きをきびしく凝視する立場に在ったのである。まして、首相としてその交渉に命を懸けつつあった人は、同学の先輩であり、年来の同志であった岸信介氏。——サン・フランシスコ講和条約発効の最後の機会まで、賀屋興宣氏を加えて三名、遂に追放を解かれなかった、敬愛する先覚であったのだ。

この時、観光客の群に交って秘かに横浜に上陸し、ただちに関西へ奔って、安保改訂反対の学生運動を組織し、指揮した背後の人物は、イワン・イワノウィッチ・コワレンコ。後のソ連共産党政治局次長である。

百二十万兵力削減の

提案の最後は——

この時期におけるソ連の必死の策謀が日米安全保障条約

改定の交渉にどのように大きな破壊的效果を及ぼしたかを、今も、鮮烈に記憶している。百二十万の兵力削減の提案も、狙うところは、日米安全保障条約の改定を阻止することに在ったのである。日・米両国を条約の破棄に追い込むことに在ったのである。——まさしく、今日の事態と瓜二つだ。

第一、提案者であるソ連自身、全面軍縮を実行する意志などを爪の垢ほどでも持って居たか？

せいぜい百二十万の兵力。労農赤軍の全兵力から見なれば、ほんのひとつかけらに過ぎない。——だが、その見せ掛けだけの軍事力削減すらも、労農赤軍幹部の激しい反対を呼び起こして、結局、有耶無耶に終ってしまったのである。

現在の五十万兵力削減の提案にしても、ゴルバチョフ書記長は、すでに労農赤軍幹部の必死の反撃に遭っているのだ。

ソ連の脅威にどれだけの 変化が起こり得るか？

たとえ、また、現実に五十万の兵力を削減することが出来たとしても、それによって、ソヴェエト連邦の巨魔の脅威にどれだけの変化が起こり得るといえるのであろうか？

労農赤軍とは、平時においてすらも、兵数五百六十万を擁する、世界に例を見ぬ巨大な常備軍なのだ。その五百六十万の中から、仮に五十万を削減してみたところで、ソヴィエト連邦という巨魔の軍事的優位にどれだけの変化が起り得ると言うのか？

周囲の自由主義諸国が仮にそのソ連の誘いを全く無視したにしても、結果はその通りなのである。

まして、もしもソ連の欺瞞が効を奏して、それらの諸国が先を争って軍備縮減に走るようなことにでもなったならば、それこそ、ソ連の軍事力の圧倒的優位は、確実に根をおろし、増大するだけであろう。

五百六十万の常備軍

——その実質的構成

まして、何よりも心に留めて置かなければならぬ事實は、そのソヴィエト連邦の軍事力の極めて複雑怪奇な構成であらねばならない。

五百六十万の常備軍。その中には、国家保安委員——いわゆるKGB——も、内務省軍——GRU——も含まれているのである。

そのKGBだけでも、その数は五十七万。これに加え、百四十万に及ぶ鉄道建設部隊・労働部隊も存在する。

これらの特殊部隊をいくら削減して見せたところで、ソヴィエト連邦が保有する労農赤軍の悪魔的脅威には、いささかの変わりも無い。むしろ、これによって他の諸国を欺いて、彼等を軍備縮減に追いやる事が出来るならば、ソ連としては、躍り上がって喝采したくなるほどの大きな成功であらねばならない。

解体される部隊の新鋭の

装備は何処へ？

まして、彼等がまず解体すると言うのは、ヨーロッパ大陸に在るソ連軍部隊である。

これを解体して見せることは、なによりも、眼前の西ヨーロッパ諸国から敵意を奪い、彼等をソ連との協力に追い込むための最も有効な手段であらねばならない。

フランス共和国大統領ミッテランは、すでにその誘いに乗って、俄かにモスクワ詣でを繰り返しつつある。そのフランスと相隣するドイツ連邦共和国——いわゆる西ドイツのコール首相までも「負けてたまるか」とばかりに、モスクワ詣でを重ねている。

それも、これも、結局は、通常兵力削減の話し合いが一日も早く開始されることを希望するが故に他ならない。

※以下P・39下段に続く。

軍事常識

北方領土

久松 公郎
(連盟理事)

北方領土の日

二月七日は「北方領土の日」である。この日は、安政元年、千島列島の択捉島以南を日本領とした「日露和親条約」(下田条約)締結の日に因み、昭和五六年、政府がこれを「北方領土の日」と定めたものである。

第二次大戦後、四〇余年を経たものの、北方領土に対する国民の思いは、ソ連の不法占拠に対する憤りとともに年々深まるばかりである。この問題を解決済みとするソ連の一方的な主張は、大戦末期の背信行為と相まってわが国民の強い不信と反感を招き、日ソ関係を極めて冷たいものとしている。

ソ連の不法占拠

昭和二〇年、終戦の日から三日後の八月一八日未明、ソ連軍は砲撃とともに千島列島北端の守占島に上陸、日本軍

と激戦の末、八月二三日局地停戦協定を結んだ。以後、ソ連軍は島づたいに南下、得撫(ウルップ)島まできたところで一旦引き返した。しかし、択捉島以南にアメリカ軍がないのを知ったソ連軍は、八月二八日、突如、択捉島に上陸を敢行、九月一日、色丹島、同二日及び三日、国後島及び歯舞諸島に上陸してこれらわが国領土を占領した。まさに、終戦の間隙に乗じた強盗行為であった。

島民は苦しい抑留生活の後、すべて日本本土に引き揚げさせられた。

わが国の主張とその正当性

今、北方領土問題の中心となっている択捉、国後両島(南千島)が、早くからわが国の実効支配が及んでいた固有の領土であることは、一八五五年(安政元年)の「日露和親条約」で互いに確認されたものである。また、当時、日露両属の樺太と得撫島以北の千島を交換した一八七五年(明治八年)の「樺太・千島交換条約」は、既に択捉島以南がわが国の領土であったことを示している。

一方、歯舞、色丹両島は元々北海道の一部であって、ソ連の占拠は無法以外の何者でもない。

「サンフランシスコ平和条約」(一九五一年)は、明治以降わが国が得た領土(台湾、朝鮮、千島、南樺太、南洋諸島等)をすべて放棄させた。しかし千島に関しては、放棄

したのは得撫島以北であることは当然である。

なお、わが国が放棄した南樺太及び千島の帰属については、連合国間の不一致のため平和条約では決定せず、ソ連はこれを不服として条約に調印しなかった。一九五六年の日ソ共同宣言においても、わが国が反対してソ連帰属は規定されなかった。ソ連の千島領有の主張は、根拠に乏しいと言わざるを得ない。

ソ連の主張と「ヤルタ協定」

ソ連がその主張の主たる根拠とする「ヤルタ協定」(一九四五年)は、ソ連の対日参戦と引き換えに南樺太と千島のソ連帰属を取り決めた米英ソ三首脳の密約であった。

しかし、この密約に基づくソ連の主張は、領土不拡大の原則を謳った大西洋憲章(一九四一年)及び連合国共同宣言(一九四二年)に矛盾し、わが国が受諾した「ポツダム宣言」に言う「カイロ宣言」(一九四三年)の領土条項にも明らかに反している。

言うまでもなく、わが国としてはこの密約に一切関知せず、何等これに拘束を受けるものではない。また、この密約は、有効な日ソ中立条約(一九四六年)を侵させる契機となったもので、その意味でも容認しがたい。「ヤルタ密約」は歴史の汚点と言えよう。

その後、米国は、「ヤルタ協定」の性質と戦後のソ連の

国際法違反を理由にこの協定の効力に問題があるとし、一九五六年、南千島は日本に帰属することを支持している。

一方のソ連は、自らイニシアチブを發揮したヘルシンキ宣言(一九七五年)を楯に、第二次大戦後の現状変更を固く拒否しているが、最近はソ連国内においてすら、これを打破しようとする民族運動が起きている。

ソ連軍の展開と軍事政策

ソ連は一九七八年以降、国後、択捉両島及び色丹島に師団規模の地上軍部隊を配備しており、戦車、装甲車、各種火炮及び対空ミサイル、対地攻撃用武装ヘリコプターM1—二四ハインド等のほか、ソ連の師団が通常保有しない長射程の一三〇耗加農砲が配備され、各種訓練が活発に行われている。また、択捉島天寧飛行場には、MIG—二三戦闘機フロツガーが現在約四〇機配備されている。

これらは、わが北方領土の各島が、極東ソ連軍の艦艇や航空機の外洋進出に伴う前進基地として、また、戦略ミサイル搭載の原子力潜水艦の行動海域であるオホーツク海防衛の一翼として、ますます戦略的価値を増大していることによるものと思われる。

最近、ソ連の対日接近の姿勢に拘わらず、今のところその極東軍事政策には変化がないことを知る必要がある。

土光氏に学ぶもの

田 麿 勉
(姫路郷友会会長代行)

山伏の風貌、行者の身なり、生涯を通じて困難なものへの飽くなき挑戦に徹し、「行革の鬼」「財界の荒法師」と異名を取った土光敏夫経団連名誉会長が八月四日ついに天寿を全うされた。齢九十一才だった。

正に清廉剛毅の人。私生活では「思いは高く、生活は低く」を念頭に、まず自らがその範を示された。ゴルフはやらす、宴席を嫌い、目刺を好み、自宅の菜園に鋤を振うことをこよなく愛されたという。また信心深く、毎日の読経を欠かさず、古色蒼然たる茅屋を住家とし、生活には贅沢を全くよせつけず、余剰の金の悉くを母堂の創設された女子校に寄付されたという。

この独特の「我慢の哲学」に徹した有言実行の人生は不世出と評されるが、身命を賭して遺された行政改革の足跡は、後世に燦然と輝くであろう。だが「土光臨調の最大の目玉だった旧国鉄の分割、旧電電公社(NTT)の民営化」の成功に続くはずの税制の抜本改革、行財政改革が道半ばであることを考えるとき、その死は惜しみて余りある。

折しも土光氏死去の悲報が全国を走った四日、衆議院予算委員会の審議が始まった。リクルート問題を俎上にあげた野党の攻勢を真つ向から受けていたのが、竹下首相や宮沢蔵相だった。これは偶然の生んだ皮肉というべきか。しかもこの日は社会・共産党の審議拒否の欠席(共産は次の日から出席)という異例の形の中で、竹下首相に対するは公明党矢野委員長。例によって丁重に「李下の冠」論を以って首相に迫り、「冠りが相当傾いている」と決めつけていた。しかし、同氏も、週刊誌や月刊誌上で同党の離反議員から八億円の東京豪邸の資金の出所を明らかにせよと攻撃を受けている最中だ。矢野氏対竹下氏のこの一場面、攻撃を知る者にとってどう映ったか、興味を誘うところである。

土光氏の死は多くの得難い教訓を後世に与えた。「政治には金がかかるが、かけすぎると民主主義は滅びる」行革に命を削って逝かれた氏の肺腑をえぐる怒声が、今日も耳をつんざいでいる。

(63・8・10) 合掌

政治条約(INF)に惑わ

されるな

重野義夫

(岡山県支部副会長)

人類学者の言によると動物は約十萬種類に及びその中間が何故万物の靈長になったか？ それは人間には闘争心・競争心・蓄積欲そして子が親を愛する特性が基軸となり、あらゆる動物の上に君臨し支配する徳性を施したるが

為に現在の如き文化図式が成立したのである。然しソ連は七十年前より人類の歴史文化を否定し宗教・大金持ち・地主を抹殺し、平和と言う一般大衆に受け入れやすい念仏を唱えながら世界戦略(共産化)を志し、膨張主義に徹しあらゆる面で戦争を開始したのであるが、戦争の災害は悲惨であり冷酷で残虐であつて人類社会にとつて最も大きな痛手であることは否定すべきものではない。個人としても国家としても戦争防止には最大限の努力を傾けることも論を待たないのであるが、現在その悲惨さだけを強調して、

ただ「平和」「平和」と念仏を何万回唱えても何の効用・効果もなく平和を実現することは全く不可能と言わざるを得ないのである。

一、(ジュネーブ四月十九日発の時事AFP)デクエヤル国連事務総長は、十九日ジュネーブで講演し「第二次世界大戦後の武力戦争・紛争・闘争で千七百万人が死亡、現在も三十六ヶ所(イラン・イラク含む)で武力紛争が起きているが、その犠牲者の五分の四は民間人である。又四ヶ国に一ヶ国の割合に当たる四十一ヶ国から五百五十万が現在戦争にかかわっている。これ等の戦争を止めようとする国連の努力はこれらの武力紛争が内紛であるとの理由で介入を拒否されたり、安保理事会の五条により常任理事国の拒否権にあつたりして実らないことがしばしばである。一

方で国連は武器禁輸をほとんど出来ないが、武力紛争の原因つまり経済的不公正とか国境紛争などの解消に貢献でき又交戦国同志がメンツを失うことなく交渉する場を提供できると指摘しているのである。

今年六月一日モスクワに於いて批准書交換になつたINF全廢条約は米・ソ間に保有する射程五百キロから五千五百キロの陸上から発射する長距離ミサイルを破棄するもので全核ミサイルの八%に当たるものであるが、過去拡充に拡充の一途を辿っていたものが消滅されると言うことは画期的なものといふべきことだ、真にこれが三年以内に消滅が期待されることとなり、そして又五月十日に始つたソ連軍のアフガニスタン駐留軍約十一万五千人が来年二月迄に全部撤収することになつたが、アフガニスタンの今後は内戦の激化によつて住民にとつてはレバノンと同様悲惨で冷酷の様相を呈することが予想されるのである。我々はこの二つの事象によつて米・ソの緊張緩和で世界中がデタントとなり戦争のない平和が訪れることとなるであろうか？忘れようとして忘れることのできないのは今より四十三年前の八月九日の午前〇時を期して突如ソ連の大軍が満州・樺太の国境線を疾風・迅雷の如く突破して日本に武力攻撃をしかけて来たことである。

一、過ぐる大東亞戦争で日本と米・英の戦争は端的には日

本の武力攻撃・宣戦布告によつて昭和十六年十二月八日に開始されたのである。他方日中の武力衝突事件は昭和十二年七月七日の蘆溝橋事件と言う小さに武力衝突が中国全土にまで拡大されたのである。日本は一九四〇年九月十日・独・伊三国同盟、一九四一年四月日・ソ中立条約を締結した。四一年六月ドイツは独・ソ不可侵条約を破棄して対ソ攻撃を開始したのであるが、日本は日・ソ不可侵条約を守り第二次世界大戦終結までの二一七四日中最後の七日を除いて九九・七%の期間中日・ソ間には平和が維持されたのであつたが日・ソの平和を一方的に破つたのは誰か？それは鉄面皮のソ連である。ソ連の背信的行為は武力攻撃とその後が続く謀略の数々、民族の受難を思い起こさざるを得ないのである。更にわれわれとして忘れることの出来ないのはソ連が当時満州にいた軍民五十七万五千もの日本人を武装解除後の軍民の早期返還を規定したポツダム宣言に違反し、シベリヤ・モンゴル・中央アジア等の強制収容所に移送し過酷な労働と栄養失調により三十四万人を殺害したのである。従つて日本の方に賠償請求権があるのに、一九五六年の日ソ共同宣言ではソ連が対日賠償請求権を放棄したことになつてゐる。全く主客転倒も甚だしい。北方四島の一括返還を要求し続ける日本人の心奥にはこの大きなソ連の戦争責任の問題があることを日本人は勿論ソ連も知

らなくてはならない。日・ソ戦争に関してはソ連が国際法に違反して数々の暴行・謀略を行なったのであり日本は最大の被害者である。

一、ソ連と言う国は世界戦略（世界中を共産主義国家にする）には日ソ不可侵条約を破った如くソ連七十年の歴史の中で三十八回も条約破棄を行ない、国際条約は破る為にあるのだと豪語うそぶいているのである。月刊誌知識の特集ポストレーガンへの警告を読むとレーガンの変身はゴルバチョフの危険な罠に翻弄されている驚馬であると警告しているのである。米国ではINF条約を中心とする動向を「デタント」と呼んでいるのであるがこれはゴルバチョフのソ連流権謀術数であって、ゴルバチョフ書記長は米国の一九八八年の総選挙を狙って米国に平和攻勢をかけてきたのに対し、レーガンが対ソ強硬から柔軟政策に変身したのである。この条約は、戦略・戦術・軍事条約でなく政治的条約であり「平和」というイメージは如何なる一般大衆も忌み嫌うものでなく、特に選挙の年である為に去る五月二十七日米上院本会議に於いて九十三対五と言う米議会始まって以来圧倒的多数でINF全廃条約が批准されたのであるが、ソ連はINF条約によってSS20の生産は不能になったが、射程一万五千キロSS20の到達距離の倍の偉力を持つSS25を今まで通り週に一発の生産をし、いままでと

同じSS20の施設でSS25が生産されるのである。米国はINF条約でソ連のSS20の生産を合法的に止めさせ、SS25の生産をこのままのペースでいくと三年後には二百基以上に拡大され、SS20核弾頭（三発）からSS25に取り替えると精度の高いSS25（中距離核弾頭）に戦力転用出来ることになるのである。レーガン大統領就任期間八年間に「冷戦」から「デタント」に百八十度転換したが、戦力の点では全く主客転倒ゴルバチョフの危険な罠にマンマとばかり、ソ連の世界戦略に完全に乗せられてしまったのである。

一、ソ連はこの八年間政治的弱点・経済的不振・技術の遅れ等々国力の減退を見せながらも自由主義国に対し領土膨張政策がソ連の指導部の百年の大計として大成功させたのである。総合的世界戦略を立て、一步もゆるぎなく世界是（ソ連流）によってロシア帝国を引き継ぎ、七十年前の帝政ロシアの帝国主義を踏襲しているのである。ソ連はヨーロッパ帝国の最後として残り、他の帝国オランダ・スペイン・フランス・イギリス・ドイツ等々の帝国はすでに消えていっているのである。エドワード・ルトフの国際戦略研究所の教授も「ソ連と言う国家はロシア拡張の為の道具であり、この地上に唯一残された帝国主義国家である」と述べている。その様な世界制覇を目差したソ連の国家的・

民族的目標がいわゆる「大戦略」を形成することになったのである。ソ連の世界戦略に対して是を防衛する為に立上ったのが北方西洋条約・米豪ニュージランド安保条約・日米安保条約等々である。しかしこの大きなソ連に対する条約もソ連の巧妙極まる攻勢で破り去り日米・西側の必死の努力も実らず、第三世界の国々がソ連の配下となり衛星国化として下がり下がってしまったのである。八十年に当選したレーガンはソ連を「悪の帝国」と呼びながら西側の封じ込み作戦が破れたので、強い国家攻撃力の国家に君臨し、力に對し力で對向しなくてはならないと六百隻海軍体制・反共ゲリラの応援・B I爆撃機の生産・中性子爆弾の生産等々によりソ連の世界戦略撲滅の動きは最頂点に達したが、世界貿易で世界一の借金国になり下った米國と前述のソ連の経済的行き詰まりが政治条約となつたのであつて眞の握手でもなく眞のデタントでもないのである。ソ連が世界戦略を完成する為には先ず米國を倒し、西側の団結を崩し、西歐を米國から引き離し、INF条約により西歐を非核化することがゴルバチョフの考えでありこれにうまく乗せられたのがレーガンである。レーガン大統領の変心についてはいろいろの説があるが、ゴルバチョフの恬淡・磊落な個人的魅力がありマルクス・レーニン主義者には似つかない信仰性が非常に強い面もあると「タイム誌」は指摘してい

るのである。ソ連と言う國は世界で始めて神の否定・宗教の否定・大地主金持ちの撲滅を行った。それを否定するのは共產主義の理念を根本的に変質するもので、共產主義そのものを崩壊してしまうのである。ゴルバチョフはそんな甘い考えをみじんも持っておらないのである。

ゴルバチョフは二十一歳にしてモスクワ大学三万人の学生長として采配を振り、ライサ夫人は同じ大学で共產主義の根本的の哲学を論議した生粋のマルクス主義者である。ソ連の目指すゴールは、マルクス主義より一步も踏み出るものではなく常にそのゴールは不変である。

米國のウィリアム教授も「ソ連の戦略・戦術は超大国との力關係に於いて変化するが、マルクス主義の変革は絶対不変である」と警告している。ソ連外交の最終的ゴールは米・ソ協調でなくデタントと言う開花の裏面は西歐諸國と米國の離脱工作にすぎないのである。

一、帝國ロシアがキリスト教から國教になつて約千年を迎えるのであるが、ソ連の宗教人口は七千万人と言われているが建國から七十年間の無神論國家で通した國が一千万人の宗教者が増えたと言うことは共產主義は人間の心の救済には無力という証拠になる。それにかえて経済力の面から推理するとGNPが資本主義國の1/4しかないのが社会主義國であると実証されている今日いまだソ連の世界戦略が衰

えることなくゴルバチョフの巧みな陰謀が極めて有効に働いていることはソ連の崩壊には時間もかかるし我々は夢にも今日の米国とソ連のデタントと言う如き巧好な術策に騙されないことである。

ペレストロイカ(立て直し)はゴルバチョフ書記長の専売特許の様にみえたが、東ヨーロッパ共産圏ではソ連より早く進行中であるが遅々として進まず、その結果として社会主義陣営が阿呆の一つ覚えとして誇っていた、

社会主義には「失業なし」「倒産なし」「物価安定」が根本から揺るぎ始め、ソ連以上に厳しい局面が迫りつつあるのである。ソ連を始め東欧諸国においては、実際個人の自主性・企業の自由裁量を認めると言っても共産主義を疑って破壊することは毫も許されないものであって、ここにペレストロイカの限界と実施に対する困難性につきまとうのである。

日本のマスコミが、ソ連協議会のテレビ中継を見ながら「ソ連も民主化された」「ソ連はデタントに向った」との単純な感想を抱いたら大間違いで、扇先生の共産国家の本質の中にもある様にソ連が南を求める侵略性はソ連人の本能であると喝破された如くゴルバチョフのペレストロイカは絶対に「制限主権論」をはみ出ないもので我々日本人は『ゴルバチョフ書記長の真の狙いは何か?』をよく考慮する必

要がある。ペレストロイカで誤魔化す苦しいソ連の国内問題を考慮しつつ政治的・経済的に政権末期にきたポストレーガンが対ソ強硬論から百八十度変化した米国の国内事情も考慮しながらINF条約と共にソ連が力を入れているのが東西貿易の拡大も確かにゴルバチョフの世界戦略の一環と考えなくてはならないのである。

レーガンへの懐疑の声が米国の軍人・知識人の間に高まっている事実も我々は知悉しておらなくてはゴルバチョフの危険な罠にうっかりかからざるを得ないのである。

※P・31末尾より続く。

その解体が示唆されつつある在ヨーロッパ・ソ連軍部隊は、最も新鋭の装備を以て知られているものである。

部隊は、或は解体され、消失するかも知れない。だが、その部隊に配備されつつある新鋭の装備も、また、俱に廃棄され解体されるという保証は在るか? 或は、また、その装備がそのままに、他の地域——たとえば、わが眼前の極東諸地域に在るソ連軍部隊に移される可能性は在り得ぬと思うか?

前述した通り、ソ連がその侵略したアフガニスタンから撤収した最新鋭の対空ヘリコプター部隊を、事もあろうに、わが眼前の樺太に移し配備した事実も在るのだ。

「サイレント・ミッション」(七)

訳者・柏木 明

(連盟理事)

バアーノン・A・ウォールターズ著

七、フランコ將軍

○難かしい任務

パリで行われていた中国及びベトナムとの交渉ついでに、ニクソン大統領とキッシンジャー博士の指示を受けるべく、私は一九七一年二月パリからワシントンに戻った。

二月十六日の朝、私は大統領の部屋でニクソン大統領に会うことになった。所定の時刻にオーラルホールに入ると、大統領は快く私を迎え入れて椅子をすすめた。やがて、彼は「スペインの情勢特にフランコ總統の死後に起りうる政治情勢を懸念していること、スペインは西側にとって非常に重要な国であり政権移譲をめぐる混乱や無政府状態に陥ることを望まないことなどを話した。また大統領は、フランコ將軍が若いジュアン・カルロス皇太子に権力移譲を希望している」と述べた。皇太子は最近ワシントンを訪問し

た折、大統領に非常に好ましい印象を与えていた。そこでフランコの監督の下でカルロス皇太子に平穩かつ秩序ある状況下で政権を移譲することが最も望ましいと大統領は感じていたのである。また、フランコ將軍はフランコ体制から君主制への移行を成功させるためには強力な首相の任命が必要であることを指摘していたと大統領は述べた。

大統領はこの問題について唯考えているだけで、スペインの国内問題に差し出がましい介入をする意志のないことを付言した。彼は真実スペインとスペイン人が好きであり、過去二回の訪問の機会に彼に寄せられた暖かい歓迎に対し深い感銘を受けていた。大統領はスペインの安定に大きな関心を持つていたことから、私にスペインへ行って単独でフランコ將軍に接見し、もし可能であれば彼の引退後の事

態をどのように考えているか調べてくることを要望した。

この指示で私が懸念したことは米国外務省に知らせず、第二にフランコに彼自身の死について話すことは決して容易なことではないことだった。そこで私は大統領に「スペイン軍將校を通して単独でフランコに会見する手筈をするにしても、米国外務省や國務省の援助なしにどんなチャンスがあるでしょうか」と質した。すると彼は「そうではない。君は前に会ったことがあるのではないか。それを今度もやれ」ということだった。

そして大統領は、私の帰国報告はキッシンジャーの秘書を通して彼自身の秘書ローズ・マリー・ウッズに記録させるよう指示した。この問題については、大統領がキッシンジャーに話したところ、彼は賛成しなかったので、大統領自身の決心で事を進めようとしたのだと私は想像した。

彼は私にフランコ將軍宛の親書を渡し、直接將軍に渡すように言った。最後に大統領は私が必要ならばマドリッドのロバート・ヒル大使にこの件を話しても良いと言ったが、私は大使とスペイン外務省との間が気まづくなることを避けるためにそれをお断りした。彼はまたヒル大使宛の書翰を手渡した。私はこの難かしい複雑な任務を如何に遂行するか思いめぐらせながらパリに帰った。

○マドリッド訪問

二月二十三日、私はマドリッドに飛び大統領の書翰をヒル大使に手渡した。しかし書翰には私のマドリッド訪問の目的は触れていなかった。有能なヒル大使は私が何の目的でマドリッドに来たかを考えたことは当然である。彼は多くの彼の仲間とは違っていた。ヒル大使はグレゴリオ・ロペス・ブラヴォ外務大臣が海外旅行の不在間にフランコと会見を準備することは難かしいと考えていた。私は以前から良く知っていた首相ルイス・カレロ・ブランコ提督を通じて会見を準備すれば大丈夫だろうと述べた。

翌朝私はブランコ首相に会って大統領の意向を伝え大元帥との会見を依頼した。その内に外務大臣が帰国して複雑な調整の結果、首相からフランコ將軍は午後五時、エル・パルドー宮殿で接見することを伝えられた。

○フランコ將軍との会見

私は提督に、外交番号の車を使いたくないので車の提供を依頼すると彼は快く応じた。

カルロ・ブランコは、フランコがかなり老齢で、時としてぼけているように見えることがあると予告した。スペイン人は彼が単独で外国人と会見することを好んでいなかった。彼は私のために果して実現できるかどうか解らないフランコとの単独会見を準備してくれたことは、私には充

分解っていた。

会見の十五分前にエル・パルド宮殿に到着すると制服の係官が私を二階の大きな待合室に案内した。壁全体を黄色の絹で被われた静かな待合室で待っていると五時を打つ時計の音が静寂を破った。

アデナウアーに似た老フランコ將軍は時間に厳格であった。スペインのカルル五世大帝はユステで時計で囲まれながら死んだ。私は一人で待っていたがそれ程長い時間には感じられなかった。

きっかり五時にフランコの私室に導かれた。そこはかつて私がアイゼンハウアーと一度、ニクソンと二度、彼に会った時と同じ部屋であった。彼の傍には外務大臣が立っていた。フランコ將軍は制服を着ていたがその他には誰もいなかった。

フランコ將軍と単独会見を依頼した点は外務大臣によって踏みにじられたことは明らかで、私はそうしてはならないと考えた。私は先づ、フランコ將軍が私を引見してくれたいことに対してお礼をのべ、そしてニクソン大統領の親書を手渡した。ロペス・ウラボーは書翰を受けとって封を開き、ニクソンの書翰のスペイン語の訳文を將軍に読み聞かせた。將軍はうなづいて私に椅子をすすめた。

次いで私はニクソン大統領が一九七〇年十月スペインを

訪問した際に大元帥とスペイン国民からうけた素晴らしく感動的な歓迎を忘れることができないことと、モンクロア迎賓館で大統領が私に「スペイン国民は真の友人である」と話したことを伝えた。フランコ將軍はうなづいて「それはほんとうである」と言った。

私はフランコ將軍に「ニクソン大統領が米国の政治だけでなく世界の責任を背負っていることはご承知のとおりです。大統領はスペインの将来の安定や、近隣の情勢に関するフランコ將軍のお考えを非常に重視しております」とのべた。

フランコ將軍は先づ中東情勢について語り、ナセルの死は世界の中のこの地域における植民地問題調停の機会を失ったと感じていると談じた。また、彼はソ連とのSALT会談では、ソ連は調印したがそれを尊重しないだろう。彼らと良い関係を持つことは非常に難かしいとのべた。私は彼の意見に対して笑みをもって答えた。その瞬間老人は笑顔を輝やかせ、そして彼は讃辞に対してうなづき返した。

彼は「大統領が最も関心をもっていることは私の死後スペインで何が起るかということだと思っている」とのべた。私は「將軍、そのとおりです」と答えると、彼は「政権の継承は秩序よく行われるだろう。後継者は皇太子に代るべき者はいない。スペインは我々が望んでいる筋書から

少し距離をおいて動くかも知れないがしかしそれは別の筋書ではない。スペインは米国でも英国でもないし、またフランスとも同じではない。スペインである」と語った。

また、彼は国防軍を手中から離してはならないこと、皇太子は彼の死後情勢を掌握する能力があるという確信などを披瀝した。

彼はまた、政権の継承を確実にするためいくつかの法律を創設したとのべた。彼は笑いながら、国民は法律が機能するかどうかを疑っているがそれは間違っており、継承は平穩裏に行われるであろうと言った。

○フランコ將軍回想

彼は神とスペインを信じていた。階段を静かに降りながら、どれだけの人間が人生の道程においてその人自身の死を冷静に語るができるだろうかと深く考え、それはとてもできないことだと思った。

フランコ將軍は老いて弱々しく見えた。彼の左手は時々激しく震えるので、彼の片方の手でそれを押えていた。そして遥かに遠くをまた時々問題の焦点に思をめぐらせながら彼の死やスペインの将来の安定などについて考えを述べていたように感じられた。

大統領は私がフランコ將軍との会談から得た以上の内容を求めていると感じ、表向きスペインを離れることにし

て、私は友人であるスペイン軍の主要人物と会った。

私はワシントンに帰り大統領に報告書を提出した。そしてフランコ將軍の冷静な態度に驚き、誰でもできることではないと付け加えた。
(つづく)

※P・49 末尾より続く。

いづれにせよ、天守建築の草創期のかたちをよくとどめている貴重な文化遺産であって、国宝に指定されている。現存唯一の個人所有の城であって、管理は犬山市が当たっている。

五、現在の犬山城

犬山の地は戦災の影響も少なく、国宝指定の犬山城天守は城跡とともに一般に開放されて、観光の名所となっている。

市内には織田有楽斎(信長の弟)ゆかりの茶室「如庵」(国宝)が移築されて存在し、明治村が建設されて、明治の文化財指定の建造物が全国より集められて偉観を呈している。

夏には木曾川で「鶉飼」も行われ、長良川のそれに匹敵する観光にはこと欠かない処となって全国に知れわたっている。

そのためモノレール、ホテル、遊園地など、市や名鉄は観光に意を注いでいる。

現代に見る間接侵略・革命(十)

狩野 信行
(日本軍事史学会監事)

前々号から東欧唯一の非共産国ギリシヤにおいて展開された、国際共産勢力の間接侵略と、第二次大戦間に成長し続けてきた国内共産諸勢力の武装革命行動について眺めてきた。一九四七年三月からのトルーマン・ドクトリン宣言と欧州経済復興の為のマーシャル・プラン発動、これに対する同年十月からのコミンフオンム結成と東欧圏経済発展

の為のコメコン結成によって、第二次大戦後の東西対決・所謂冷戦開始は決定的となった。が、ギリシヤは、これら全般背景の中で、自らの力を振り絞って所謂内戦を戦い抜いて行ったのである。一九四八年の内戦は、政府側にも反政府側にも痛く苦しいものであったが、陽の光は逐次に政府側に暖かく当たり始めたのであった。

(ウ) 一九四八年のゲリラ戦・対ゲリラ戦(つづき)

共産側の二大拠点の一つであるピトラ山(二二二八米)の陣地帯に対して、やがて政府軍が攻撃をかける事となるが、これは容易には成功させる事ができなかった。その

上、政府軍主力が北部地域で作戦し続けている間に、中部及び南部ギリシヤで、共産側が活発なゲリラ行動を取り始めるようになり、とくに南部のペロポネソス半島(例のスパルタ・オリンピアのある半島)では、約三万五千のゲリラが優勢を占めようとして、政府軍を慌てさせた。

このようにして春から夏へ、又夏から冬へと果てしないシーソーゲームに、政府も政府軍も挫折感を抱き始めるようになった。真冬に入るとユーゴーやアルバニヤ等ソ連側の支援を受けた共産ゲリラは、例の二大拠点の一つであったグラモス山の再占領・再構築を完了していった。

が、しかしゲリラ側の受けた傷も、実は甚だしく大きかったのである。この四八年中に生じたゲリラ側の損害は、戦死・重傷・捕虜・投降等合わせて実に三万二千に上ったと言われる。ゲリラ側は、国外にいた予備兵力や国外の聖域で回復した傷病兵の他に、この一年間で約二万四千の男女を村落等から強制的に徴用して兵力損耗を補填してい

た。ゲリラ兵の大部分は、訓練も思想教育も不十分な新兵になっていたのである。ゲリラ側は、朝鮮戦争やベトナム戦争でもそうであったように、各部隊に政治委員を配置して思想上の監督・指導を行うと共に、小単位毎に逃亡防止委員会や十人団（十人一組にして互いに監視し合うもの）のようなものを設けて、鉄の規律を維持するように努めた。又ゲリラは、政府軍の攻撃を受けて、補給物資の集積所を放棄することが多かったので、とくに聖域から遠く離れた中・南部では、村落を襲撃して食糧を入手することが多くなり、為に一般民衆の恨みを買った。

物資や働き盛りの青年男女を奪われた人々の間に、政府軍に協力する者が多くなり、これが又ゲリラの残虐な報復を受け、住民は益々ゲリラに敵意を抱くようになった。政府の住民保護・自衛態勢の強化が進むにつれて、ゲリラの報復を恐れて政府側への協力をしづっていた住民も、次第に政府軍に協力するようになった。

(エ) ユーゴスラビアのコミンフォルム脱退

ギリシヤの共産ゲリラが、北隣りの共産三国とくにユーゴの強力な支援下に、ギリシヤ政府軍と果敢に戦っていた一九四八年六月、コミンフォルムつまりスターリンらは、ユーゴスラビア共産党は、民族主義的偏向が強過ぎると言う理由を挙げて除名した。ユーゴの追放は、東欧諸国に

大きな波紋を投げかけたが、ギリシヤの共産ゲリラもその例外ではなかった。ギリシヤの共産主義者達は、この問題について激しく論争したが、結局はコミンフォルム派が勝利した。そこでユーゴスラビアは、先ずギリシヤ国内から軍事顧問団その他を引き上げ、一九四九年に入るとギリシヤ・ゲリラへの援助を削減し始め、同年七月には国境を完全に封鎖したばかりか、ユーゴ国内にいた四千名ものギリシヤ・ゲリラを拘留して了った。ユーゴの敵対化は、ギリシヤ・ゲリラにとって貴重な聖域の大部分、各種援助の大部分を失うばかりでなく、アルバニヤ／ブルガリヤ間の、東西の連絡をも遮断される事となった。当時のアルバニヤは、今以上に力弱く貧困であり、ブルガリヤとて第二次大戦間は独伊とともに枢軸を組んでソ連と戦っていたもので、当時は共産化させられたばかりであったから、後ろにルーマニヤを隔してソ連が控えていると言っても、さしたる援助は期待できなかった。

ゲリラの総司令官マルコス将軍も、ユーゴに近い考え方の持ち主として失脚させられ、一九四九年二月四日、代ってギリシヤ共産党書記長ザカリアデス自身が総司令官に就任した。なお、マルコス将軍は「民主陸軍」をゲリラ戦に適するように小グループに編成して、機動的に戦えるよう指導していたが、ザカリアデス新総司令官は、この方式を

止め、正規軍ばかりの軍団（師団編成をとって北部山岳地帯を確保に努めることとした。

（オ） パパゴス元帥の起用と政府軍の強化

ギリラ側で総司令官の交替が行われていた丁度その頃、ギリシヤ政府は退役中であつたパパゴス元帥に対して、ギリシヤ地上軍の総司令官の地位に就くよう要請した。パパゴス元帥は、イタリヤとの戦争の時、陸軍総司令官として指揮をとつて勝利を取め、ギリシヤ国民から英雄として尊敬されてきた。同元帥は、使命を受諾する条件として「作戦についての政治的干渉は排除すること」「将校の任免や転属等の人事について総司令官が決定権を有する」こと等を政府に要求した。政府は幾多の論争ののちに、この条件を受け入れ、パパゴス元帥が総司令官に就任した。

元帥は、師団長以下多数の不適合な将校を排除して、厳正な軍規を確立するよう努めた。作戦に当つては、積極果敢な攻撃を行い、とくに追撃に際しては、十分な兵力で各方面から昼夜を問わず、休むことなく徹底的に追撃するよう指導した。又元帥は、就任する迄は、米英顧問団の干渉を極力排除するよう主張していたが、就任後は顧問団とも良く協力して、その意見にも耳を傾け、採用すべきことは採用し着実に実行したので軍の改善は著しかった。

又、パパゴス元帥は、徴兵の方法をも改善した。従来、徴

兵に際しては、思想的に疑わしい者は排除し、信頼出来る者だけを採用していたが、彼は政府に進言してこの選択的徴兵を止めさせ、適格者は思想の如何を問わず全員徴兵し、そのうち思想的に疑問のある者は厳重な観察下に置くとともに、万一寝返つても実害を受けないような任務につかせた。軍務に就くことを拒んだ者、又は共産分子と確信し得た者は、アテネ沖合のマコロニソス島の再教育キャンプに收容した。

それ迄の陸軍は、山岳師団四コと野戦師団三コの計七コであつたが、一九四九年春、パパゴスはこれら新師団八コに改編した。新師団は、兵力九千三百で、七五ミリの駄乗りゅう弾砲中隊、搜索中隊及び工兵部隊をその編成内に持ち、いかなる地形においても作戦を実施し得ることを狙いとしていた。このうち三コ師団は米國製兵器で、又五コ師団は英國製兵器で装備した。一九四九年夏迄には、ギリシヤ陸軍は六〇ミリ及び八十一ミリ口径の迫撃砲、七五ミリ口径のりゅう弾砲、重機・軽機、二・三六インチのロケット弾発射筒、無反動砲等を著しく増加させた。歩兵大隊は全部駄馬をもつた山地戦型の大隊となり、自動車はすべて上級の旅団自動車小隊にプールされて運用される事となつた。更に各部隊固有の、駄馬による輸送を補強する為に十二コの、ら馬輸送中隊を編成した。パパゴス元帥による

軍規の確立と装備そして訓練の向上は、陸軍の戦闘能力を著しく向上させるとともに、彼らの自信をも大いに高めることとなった。

(カ) 一九四九年の作戦

前年一月頃には、四万であった国民防衛隊も、四九年の初めには、五万近くに成長して、それぞれの地域の防衛を担当し、陸軍も兵力十四万七千となって充分に攻勢を取り得る態勢になった。この年の作戦計画は次のとおりである。

即ち、北部山岳地帯のゲリラを最小限の兵力をもって拘束しつつ、先ず南部ペロポネソス半島地方、次いで中部地区のゲリラを逐次に撃破したのち、北部山岳地帯のビトシ及びグラモスの陣地に拠るゲリラ主力を撃破する。次いで全国内のゲリラを掃蕩する。作戦に際しては、広正面かつ次から次へと連続的に攻撃を加え、敵が逃げ出したならば、昼夜の別なく迅速果敢に追撃する。なお作戦開始に先立ってゲリラの情報網を覆滅する。

政府軍は、作戦開始に先立って、ゲリラ最大の利点たる作戦地域情報網の覆滅に鋭意努力した。陸軍は警察と協力して、先ずゲリラに情報を提供する虞れのある者を逮捕して、一時的に拘留した。明らかにゲリラに通じていると見られた者は、監視の容易な島に収容した。又主要な作戦に先立ってゲリラ拠点周辺の全住民を、短期間町に収容し、

一時的にはあるが無人地帯を作った。これらによってゲリラは、情報の入手ばかりでなく、物資補給の道途も断られて了った。

南のペロポネソス半島では、二万五千の陸軍が三千五百のゲリラを攻撃した。この地のゲリラは、北部の補給基地から遠いので、主としてアルパニヤから細々とした海路補給に頼り、物資の入手は極めて困難であった。真冬であったので、ゲリラは衣・食・住ともに苦しい状況に立たされた。航空機を持ち、衣・食・装備等に優れた政府軍は、ゲリラを息つく間もなく攻撃し、ゲリラは秘密の補給集積所で充分に補給する暇もなく、真冬の山中で疲れ果てて撃破されていった。軍は解放した村の農民達を武装させて、自分達の村を守らせた。斯くしてペロポネソス半島全域は、六ヶ月のうちに政府軍の確保するところとなった。

中部ギリシヤにおける対ゲリラ戦も、同様にして実施され、一九四九年六月末には掃討戦の段階に入った。引続いて政府軍は、北部山岳地帯に拠るゲリラ主力を攻撃する為に兵力集中を開始し、八月上旬、先ずはビトシ山陣地に対する攻撃準備を完了した。この頃におけるゲリラ側の兵力は、国内一万八千・国外一万計二万八千、これに対する政府側の総兵力は、陸軍十五万、国民防衛隊五万、武装警察隊二万五千、それに警察五千の計約二十三万であった。



郷土の城 (19)

国宝 犬山城

佐々木 信四郎

(城郭学者)

一、木曾川に映える

木曾川の南岸に、緑に繁る小高い丘がある。その頂きに国宝の犬山城天守は聳え、四百年の風雪に耐えて、白砂利の平和な川面に美しい姿をうつし、過ぎし昔の戦乱に明け暮れたつわものどもの関とまの声も、いまは遠い歴史の中に忘れ去られて静かに映えている。

かつては織田信長に攻められ、また小牧・長久手の戦のおりには羽柴(豊臣)秀吉と徳川家康との戦渦にも巻き込まれたこの地も、ライン下りののどかな観光名所となつて、修学旅行の生徒や老人クラブの人たちなどで賑わっている。

これは歴史の証言者でもあり、未来への語りべとして貴重な文化遺産でもある。

二、犬山城の生い立ちと変遷

足利幕府の管領職斯波氏の臣であった織田広近が、文明年間(一四六九―一八七)にこの地の支配を任せられ、天文六

年(一五三七)に至り、織田信康が城を築いたという。

信康のあとを継いだ信清(信長の妹婿)は信長に攻められて城を追われてしまい、この地は信長の支配下におかれた。

信長の没後の天正十二年(一五八四)織田信雄のぶかつ(信長の次男)と秀吉との間が不和となり、信雄は徳川家康と結んで小牧・長久手の戦となった。その後、家康と秀吉は和議を結んで、この城は信雄の手に戻った。

この間戦国時代を反映して、城主はめまぐるしく替つた。

文祿四年(一五九五)には石川光吉(貞清)が城主となったが、秀吉亡きあと関ヶ原の合戦(慶長五年・一六〇〇)が起り、光吉は西軍石田三成方についたがために家康によって領地は没収され、尾張領は家康の支配下となった。家康四男松平忠吉が尾張を領することになったが、忠吉は病没して慶長十二年家康の九男義直が御三家の一つ尾張徳川

家の藩祖となり、その補佐役として平岩親吉が犬山城に入城した。

この親吉も慶長十六年には病没して継嗣なく、代つて元和二年（一六一六）成瀬隼人正正成が尾張徳川氏の付家老として三万五千石を拝領して犬山城主となった。

そして九代成瀬正肥のとき藩籍奉還となって、犬山城の封建社会の生命を終えた。

三、犬山城の位置

この地は濃尾平野を一望でき、中仙道や美濃街道を制し、木曾川の水利もあり、北尾張の戦略的な重要拠点であった。

また、城は北から西にかけて木曾川が濠の役割をし、木曾川を脊に急崖をなした処に本丸を置いている。

本丸の前方（南）に二の丸・三の丸を配し、さらにその南方には城下町が開かれた。

四、犬山城の天守

この天守は天文六年の織田信康築城当時に、美濃兼山城天守を移築したと伝えられていた。従つて現存最古の天守と思われていた。

しかし、昭和三十六年より四年間の解体修理の際の調査により、柱や貫に番付（木組みのときにうつ符号）が一種類しかなく、移築すれば必ず他に符号を記すことになり、

また柄穴などの痕跡からも、この移築説は完全にくつがえされ、現地創建と推定されるに至った。多分天守以外の櫓などの材料が移されたのであろう。

さて、天守の下部の二層櫓部分と、上部の望楼部分とは造営年代が異なり、二層櫓部分には始め小さな望楼がついていたことも判明した。これにより下部は慶長初年頃石川備前守光吉在城時代に現地創建されたと思われる、上部望楼部分は小さな旧望楼を取除いて、改めて慶長六年（一六〇一）頃増築されたと推定される。

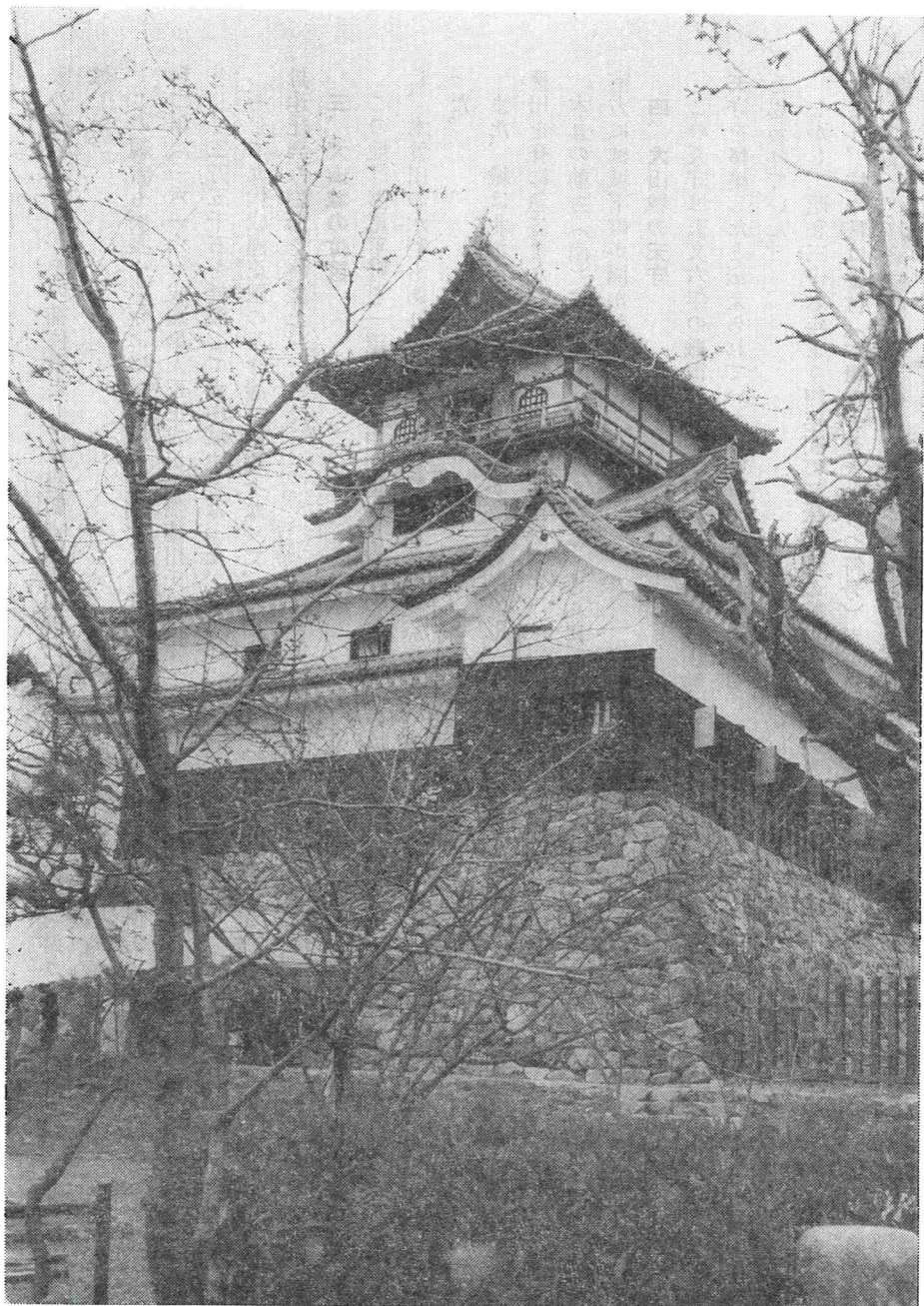
また、望楼部分の唐破風は元和六年（一六二〇）成瀬氏時代の改修とみられる。

天守の構造は、南面の石垣部分を入口とし、まづ石蔵に入り、それより初層内部に入るようになっていく。この二層部分には入母屋造りの大屋根をかけ、南面と西面に付櫓をとめない、武装本意に造られている。

なお、内部に床・違棚・帳台構えのついた畳敷の上段の間があるが、これは文化年間の改修による造りと思われる。

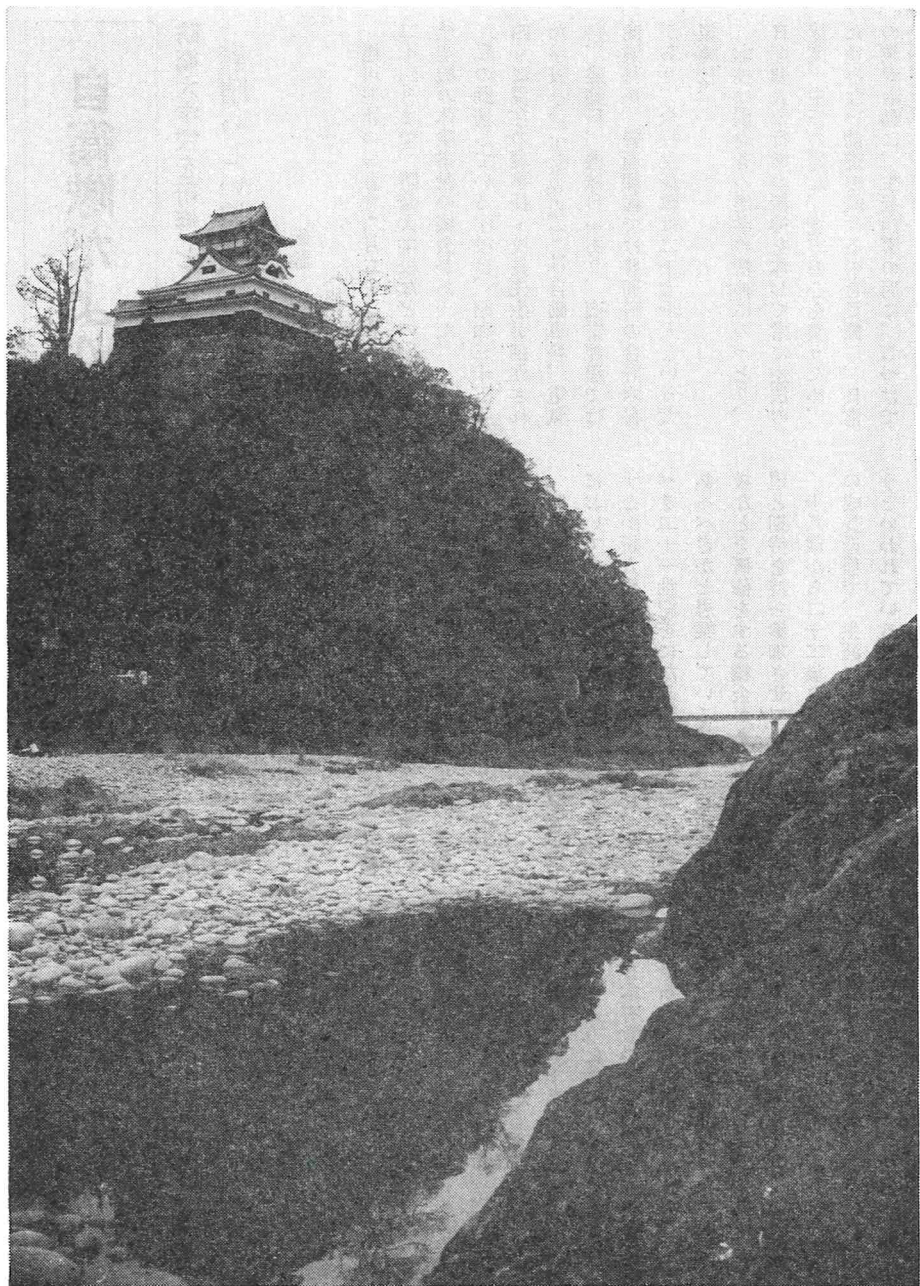
上部望楼部分は入母屋造りで、鯨をのせ、廻縁高欄をめぐらし、禅宗の華灯窓をつけて、いかにも初期形成の天守の姿である。

※以下P・43下段に続く。



天守（国宝）

二層檜上に廻縁高欄の望楼をのせた古い形式である。



木曾川と犬山城天守

自衛隊だより

防衛大学校を研修して思う

素晴らしい協調、自主性

教諭 齊藤 富男

(旭川実業高校)

旭川地連の好意で六月二十二日から六月二十四日まで、防衛大学校などの研修と、航空機の体験搭乗の機会があった。

私の勤務している学校は、昭和三十五年四月に現在の理事長・校長先生が創立された学校で、工業課程では自動車科、電気科、建築科、機械科があり、商業課程では商業科が、普通課程では普通科の合計六科があり、全校生徒数は二千七十人という大規模校。

本校は創立者の建学の精神にのっとり、日蓮聖人の行学の精神を体して常に遵法の態度、中正の考え、寛容の心を養うため、たゆみない前進を続けるのを目標に、日常の教育活動に、生徒指導の面に、しつづけ

は北海道の中の高校でも最上位にあるほどきびしく、また国家資格などについては、卒業するまでに一つ以上を取得させるという方針で生徒指導にあたり、地域社会、父母から高く評価され、支持されている。

卒業生の進路については、約三割が大学などへの進学で、防衛大学校、北海道大学、旭川医科大学などの国公立に多数が進学している。

就職希望者のうち約六十人は一般曹候補学生、二等陸、海、空士、婦人自衛官という進路をとり、卒業生の中にはすでに中堅幹部として活躍している人もいて、在校生の大きな目標の一つにもなっている。

昨今は時代も変わりつつあり、教育現場においても、文部省を中心に校則をみなおすとか新人類とかいう言葉がきかれ、来るべき二十一世紀をになう若人の教育がどうあるべきかと思案している時に、防衛大学校などを研修する機会があり、大きな希望と期待を持ち参加させていただいた。

十八歳から二十二歳までの四年間は人間の成長過程で、生涯に影響を与えるであろうといわれている期間で、その教育機関の

一つである防衛大学校での教育内容、施設設備、学生の気構えなどをじっくり観察しようと思った。教育内容についてこと細かに見学する時間がなく非常に残念ではあったが、四十五万平方米の広大な敷地の中で伸び伸びと生活する学生の姿を目の前にして、将来の教育の在り方を痛感した。学生舎での四年間の規律ある団体生活の中で養われる協調性、自主性は学生の将来にとつて多大な影響を与えるであろうと考える。

さらに、蔵書数四十六万冊という図書館の広い範囲にわたる専門図書には目を見張るばかりで、当大学校の教育内容のレベルの高さを裏付けていると考えられる。最新の大型コンピュータを駆使した実践教育、このように教育活動を支えているのは、日本有数の教授陣、広大な敷地に展開する最新の教育設備を整備することは他の大学などでは到底及びもつかぬことだろうと思う。

この見学を通じ防衛大学校を卒業される学生たちであれば、将来の日本の国家防衛の中心的存在として活躍するであろうことを確信した。

研修で学び得た知識を今後、生徒の就職指導の一助にしていきたいと考えている。

感動した空幹候校卒業式

婦人教官の「心理学」に新鮮さ

生え抜き三尉候補者

幹事 石田 明

(北海道政治懇話会)

初夏の一日、シルクロード博にわく奈良に足をいれ、たまたま航空自衛隊幹部候補生学校(奈良市法華町)の卒業式に出席する機会があった。

この日行われた卒業式は「三尉候補者」の卒業式であり、驚いたことは、この卒業生の最高齢者が五十二歳、最年少三十七歳、平均四十八歳であったことだ。

なぜこの年齢かといえば、高卒で航空自衛隊に採用され、三十年近く勤務した准尉、空曹長のうち、選抜試験に合格した航空自衛隊の「たたきあげ」下士官の初級指揮官になるコースであり、競走倍率はかなりの高率といわれているからだ。

案内をしてくれたのは、航空自衛隊幹部候補生学校の教官で婦人自衛官の一尉ドノ

で、私はすばらしい航空自衛隊と評した。それは航空自衛隊の現有勢力を指すものでもなく、卒業式の厳肅さを指すものでもない。実は案内をしてくれた婦人一尉ドノが航空自衛隊生え抜きのつわものどもに教えている課目が「心理学」であったからである。

少なくとも、指揮官であれ、教師であれ、指導的立場の者は「心理学」をマスターしてほしいと思っていたからだ。今日の学校教育の現況をみて痛感していただけに、まさに「わが意を得たり」の喜びを感じた。そして彼女と、しばし「心理学」について語り合えたりうれしい一日でもあった。「心理学」のマスターは「倫理」にむすびつき、航空自衛隊の第一線の初級幹部養成の学校に「心理学」の教科のあることは、私の承知する限り旧陸軍士官学校の課目にはなかったことで、わが国の現況に照らし合わせてまことに心強いものがあった。

スクランブル(領空侵犯に対する緊急発進)年間三百回を超える国際緊張下の今日、自らの努力で任官をめざし、恐らく年下であろう婦人教官の教える「心理学」

に、彼らは新鮮にして全く分野の違ったこの教課に、実践的教科とともに、指揮官としての人格形成の上で「心理」と「倫理」のいかに重要であるかに思いをしたことであろう。私は現憲法と自衛隊の真の姿を垣間見た安ど感を覚えた。

式場を後にする私に、「教官はすでに指揮幕僚課程試験に合格した優秀な幹部の一人ですよ」と教えてくれた人がいたが、私は思わず「すばらしき航空自衛隊」とひとり叫びながら奈良路を後にした。

注 案内役をつとめたWAFは、八月から空自幹校CS課程に入校中の柏原敬子一尉である。

(以上 朝雲)



自衛隊今は昔の物語

牧野良祥(防衛庁航空幕僚監部・二佐)

ほおりこめツ

「文句あるかッ」だと、本官はさっそくこの売言葉を買ったことにした。

「おお、あるとも。お前ら、なんでこげんな嫌がらせするとかッ」

とやり返したのだが、するとこのチビ助め、本官の胸をこすきながらぐるりとまわりをとり囲んだ仲間の方を見て

「オイ、見ろや。ゼイキンが威張つとるぞ」と、ほざいたのである。

本官の身体中の血が、ドクドクと頭にのぼり始めた。そして、拳を握りしめた瞬間、小癩にもこのチビめが、いきなり本官の帽子を、地べたに払い落したではないか。

「やりやがったなッ」

本官の忍耐は限界に達した。わが愛する自衛隊を面と向って誹謗したことも許せぬのに、その上我ら隊員の誇りの象徴である帽章を地にはわすとは。

(もう、勘弁ならぬッ)

イノシシ生まれの本官の血は、完全に逆流した。帽子を拾うまいなや、ヤツのゲンコをかいぐり、その向うズネに思うさまガツンと喰らわし、同時にその左手にいた一番図体の太え野郎に体当り。健気にも



五人のテキの重囲を、突破せんと試みたのである。ところがである。このへんまではよかったのだが、あとがいけない。

「やっちまえッ!」という喚声とともに、降るは血の雨ならぬ、ゲンコの雨。

何せ多勢に無勢、気がついたときには、五人から手取り足取りされ、まるで神輿のようにかつがれたまま、「サア、殺せッ」とわめいておったのである。

小さい頃からガキ大将で鳴らした本官のこと、今までに一村三ぐらいのケンカはこなしてきたから、なんとかなると思つたのが大誤算。ガキの頃と違って、相手が屈強な若者五人ともなれば、そうは問屋が叩すはずがないのである。

とはいえ、当時の隊員にとつて、自衛隊を悪しざまにいわれて、オメオメと逃げ出すというようなことは決してできないことであつた。たとえ、負けると分つていても、それに立ち向う気迫だけは、皆んな胸に燃えたぎっていたのである。

調子に乗った連中の一人が、「川に、ほおりこめツ」と叫んだかと思つと、アツという間もあらばこそ、本官はかたわらの川の中に、水音も高く、ほおりこまれていたのである。

(航空自衛隊連合幹部会機関誌「翼」編集者)

奇跡の生還(1)

森松俊夫

(軍事史研究家)

楽園のサンガ・サンガ島

フリリピン、ミンダナオ島の西南に、ボルネオとの間を結ぶような形で、スルー群島が散在している。その西南の端がタウイ・タウイ島。東西約50キロ、南北約15キロ。この島の南側は、大艦隊の泊地に適する。

この島の西側に、10キロ四方ほどのサンガ・サンガ島があり、その南側にボンガオ島があった。歩いて半日で一周できるほどの小島である。スルー群島には、このような緑の島々が、大海原のなかにちりばめられていた。

内海は、第三期海軍予備学生出身の海軍少尉として、同僚とともに駆潜艇に便乗しマニラ港を出発、第三十三警備隊ボンガオ派遣隊に着任した。昭和十九年五月中旬である。これから初の軍隊勤務が始まる。

その夜、新任士官四名の着任祝いが始まり、夜半過ぎまで飲めや歌えやの大騒ぎをやった。

ところが、その翌朝、軍艦旗掲揚後、内海少尉ら四名は、「消燈後、酒を呑んで騒いだのは軍紀違反だ」と怒鳴られたうえ、あつという間もなく全員ビンタを喰った。

しかし、その後は平穩無事で、当直士官のとき以外は任務はないので、島内を歩いたり、付近の島々に行ったり、魚を取ったり、気楽な日々を送っていた。

ボンガオ島の住民はモロ族で、ダド(首長)ワガスが島を統轄しており、日本軍に好意を持ち情報収集に協力してくれた。

モロ族には、山モロと海モロとがいる。山モロはジャングル内に住み相当乱暴だそうだが、海モロは柔順で、水上家屋を建てた部落で生活していた。

宗教はほとんどが回教で、男はトッピーといわれる帽子を被り、蛮刀を持っていく。この蛮刀は、ジャングルを歩いたり、

果実をとる等に絶対必要なのだ。また、彼等の生活に欠かせないのは舟であり、二人乗りの丸木舟から、日本の釣舟ほどの大きなものも作っていた。

六月一日、内海少尉は、隣島のサンガ・サンガ飛行場警備隊長を命ぜられた。同島はボンガオ島の四〜五倍も大きく、海軍施設部が、現地人や台湾の労務者を指揮して飛行場を建設しており、内海少尉は、大発に乗り約十五分ぐらいで着任した。

警備隊は、隊長以下二十数名で、二五糶二連機銃三基があるだけであった。警備といっても数時間の機銃訓練をやるだけであり、時折、ボンガオ島に連絡あるいは食糧受領に行くだけで、あとは楽しい日々を過

した。

面白かったのは野隊取り、子供にたいする日本語教育、珍しかったのは住民の結婚式に招かれたこと、海亀の料理、ヤドカリの壺焼き等。

八月、スルー諸島の海軍部隊は、各一部を残し、主力はザンボアンガに引揚げた。サンガ・サンガの飛行場建設も一応終了したので、九月、内海警備隊も施設部残員とともに、ボンガオ派遣隊本部に集結した。

取り残された派遣隊

島は、楕円形で、中央部に標高二一五米三一七米、四一五米の高地があり、北側の平地は湿地のジャングルで被われ、海岸にはマングローブが密生していたが、南側海岸は広く開けていた。島の東側には低地の半島が突き出っていて、住うのも良く、舟付場にも適していた。

派遣隊は、半島に本部をおき、二一五高地に機銃陣地、山麓に諸施設を設けた。

それでも毎日のん気な生活であったが、十月になると、米軍の空中偵察が始まった。やがて、敵機グラマンの機銃掃射や爆撃を受けるのが毎日となった。

内海小隊は、空襲のたびに機銃陣地に就いて抗戦し、他の部隊は各処の防空壕にもぐり込む日課である。敵機が超低空で海上スレスレにやってきて、二一五高地を登るように上昇してきたときは、陣地に就く暇もなく射撃を受けたこともあった。

十二月十六日、十時ごろ、B-24二機、グラマン三機編隊が来襲した。内海少尉は、何という考えもなく、今日に限って、演習のときだけ使用する指揮台に登り、指揮した。自分は殺られないという自信から油断していたのであろうか。敵機の何回目が襲撃のとき、内海少尉は指揮台から放り出され、地上に横転した。

ふっと気づいてみると、左腕上膊部が真赤になって割け、右脚大腿部外側の大きな傷口から血が噴き出していた。右手中指もブラブラしている。

最初は、それほど痛みを感じなかったが空襲が終り、部下に助けられて手当てをしたが出血が止まらず、苦しみ続けた。幸い、タウイ・タウイ島のバト・バトから陸軍の軍医に来てもらって治療を受けると楽になった。その後は、みんなの心のこもつ

た看病を受け、次第に回復した。

傷は全治しなかったが、歩けるようになったので、二一五高地の陣地に戻った。

負傷前は、敵弾は少しも恐ろしくなかったが、今度は違う。空襲を受けると、敵弾が全部自分に集中してくるのように感じ、恐ろしかったが、部下の手前、冷汗を流しながら、じっと我慢していた。

昭和二十年四月一日夜のことである。珍らしく敵の夜間空襲があり、その後、島の西北方向で異様なエンジンの音が続いたが、真暗闇の夜で何も見えない。

明け方、監視哨が、もうだめだというような顔で、敵艦艇集結の報告にきた。内海は、「総員陸戦隊武装にて集合」と命じ、自分は監視所に飛んでいった。いるわ、いるわサンガ・サンガ沖合に、空母三隻、巡洋艦一隻はじめ駆逐艦、大型輸送船、上陸用舟艇等が集結している。内海は、ただちに当直将校に電話報告し、戦闘準備を始めた。

敵は、十時ごろから、悠々と、日本軍の造った栈橋を利用し、無料で飛行場を頂戴して揚陸を続けた。

残念だが、今は何も抵抗はできない。

やがて、敵小型輸送船三隻が、サンガ・サンガ島とボンガオ島の間の水道を、派遣隊本部のある棧橋方向に進んできた。ただちに本部に連絡したが応答がない。すでに洞窟陣地に行ったのであろう。

内海少尉は、一番近距離にいる輸送船に機銃三基の集中射撃を浴びせた。うまく燃料に当たったのか、もうもうと黒煙を上げ始めた。他の船は、あわてて沖合に退避した。緒戦の大勝と喜んでいると、たちまち敵のお返しがきた。艦隊から猛烈な艦砲射撃を喰って、内海らは防空壕に待避したまま、夜まで全く身動きできなかった。

四月三日、午前中は、戦場と思えないほど静かだった。昼過ぎになると、上陸用舟艇二隻がやってきて、棧橋に近づいてきた。内海少尉は、頃合いと見図らって機銃射撃を集中し、一隻に損害を与えたが、他の一隻が応戦し、射ち合いとなった。しかし艦砲射撃が始まると、こちらは居たたまれず、機銃を破壊し、予定陣地に逃げ込んだ。

この日、派遣隊長は戦死し、士官以下数

名の戦死者が出た。

翌四日、総員約二〇〇名で新たに陸戦隊二コ中隊（中隊は三コ小隊）に再編、内海少尉は第二中隊長兼第一小隊長となり、陣地配備についた。

サンガ・サンガ飛行場は、修理が終って米軍機が頻りに離着陸していた。

ボンガオ島に上陸した敵は、派遣隊本部跡と二一五高地山麓を占領し、警戒を敵重にしている。そして観測機を飛ばし、サンガ・サンガ島の迫撃砲が猛射を加えてくるのが日課だった。迫撃砲は、いつ、どこを射撃するか分らず、これには将兵一同、全く悩まされた。

陸戦隊の携帯兵器と弾薬は豊富にあるが長期戦をやるには食糧の確保が必要であった。従来の食糧庫は敵に抑えられている。これを奪取するため斬込隊を編成し、夜間、斬込みを始めた。

しかし、夜間行動は訓練してないので、方向を誤り、ほとんど成功しない。そこで内海少尉は、昼間これを決行し、うまく成功して食糧・医薬品を陣地に運び入れることができた。

このころ、S士官以下数名が、無断で島から脱出したので、一同悲憤慷慨した。

某日、サンガ・サンガ飛行場に対する爆撃が始まった。よくよく見ると友軍爆撃機三機ではないか。翼の日の丸が目に見えぬ。全員大喜びで万才を叫んだ。西方に飛び去る友軍機をみて、日本も頹勢を挽回して、必ず援軍がきてくれると、みな大いに張切った。

しかし、その後、友軍機の姿は見えなかった。通信機は毀れて通じない。食糧は少なくなるし、斥候を出せば行方不明となる者が次第に多くなり、病人も増え、戦闘力は明らかに減退してきた。

隊長は、各指揮官と協議したのち、丸木舟三隻を入手し、ボルネオとの連絡のため三組の連絡組を派遣した。決死の脱出である。水盃で別れた。

ボンガオ島に上陸した敵は、通訳を使って投降勧告をしたり、捕虜になった隊員を先頭に立たせて弾除けにしつつ、陣前に近づいてくることもあった。(つづく)



熊本県支部だより

教育勅語奉誦会

今年には教育勅語煥発されて九十九年目を迎えるに当り熊本県郷友連では、他の協賛団体二十の中心となつて、例年の奉誦会を昭和六十三年十月三十日(日)熊本市県護国神社に於て午前十時開会、先づ天皇陛下の御病気の御平癒を祈願して、勅語奉誦、主催者を代表して矢野郷友会長の挨拶、来賓として守住、浦田両参議院議員の国を思う熱情溢るる挨拶、小川海洋会長の挨拶あり、続いて来賓紹介ありて講演に移り、熊本県退職校長会長松原尉平先生の「教育勅語と一国民としての私」と題して、戦時中熊本市内の国民学校歴任中の、食糧増産、堆肥作成で質量のみならず精神的面に於いて大いに成果を上げた経緯、それは学校長を中心にして、全職員全児童の一致協力、不平不満の声が一言もなく、今日回顧の常套

語にさえなっている強制等はいささかもなく、真に師弟同行、一体となつて力をつくし、そうした教育効果を上げ得たのは、全く教育勅語のお陰であり、その実践があったればこそであり、憂うべき教育の現状に比して正に雲泥の差であり、その困するところ実に教育勅語にありと結ばれ、一同深い感銘を受けた。

閉会に当り講師への謝辞とともに、教育勅語草案の原動力となつた、元田永平、井上毅両先生は本県出身であり、あたかも明年は、教育勅語煥発百年目にあたり、この先生の顕彰等の事業をやつてはとの提案がなされ、その為には先づここに出席の全員が発起人となつてはとの案に、満堂の拍手をもつて賛同、盛会裡に閉会した。

(熊本県支部教育部長 曾木義信)

兵庫県支部だより

捧護国之英霊

小山賀観謹詠

(姫路郷友会員)

トシハリユウスイノゴトク
年 如 流 水

ハシツテカエラス
不 還 奔

ヒトヘゼシヨウワフラスレ
人 志 前 蹤

コウフクワロンズ
後 福 論

ふるさとのやしらの杜モリチチハハよ父母よ

祖国クニの御為オシタケめ我は散りゆく

殉国ジュンクニ神靈コノシシレイ 齋 泰 運タイウンラモダラス

噫アアワレナニラモツテカ 吾 何 以 報 鴻 恩コウオンニムクイ

(上平十三元韻)

詩意

年月は急流のように勢いよく流れ去り、世人は故人の功績や勲勞を忘れて、その後招来された幸せや福祉についてのみ、あれこれと言いつつおに懐かしい故里の社、そしてことに父と母よ、あなた方の幸せを信じ、祖国の御為めに私はお別れします——祖国のために戦陣で仆れた英霊が、今日の太平の氣運を賜つたのである。ああわれわれは、この英霊に対して、どのようにお報いすべきなのか。

語意

▽前蹤マゼシ先人の業績。▽後福コウフクあとに招来された幸せ。▽泰運タイウン太平の氣運。▽鴻恩コウオン大きな恩義。

(注)

本詩篇は、兵庫県姫路護国神社大祭

に際し奉納したものである。

福島県支部だより

「自然に学ぶ」（草木の生涯）

伊藤喜代子

（福島県支部婦人部長）

満山の紅葉は 有終の美を飾り
地にかえりては 沃肥と変りて
母なる土に 恩を報ずる。

人は見ずとも 俗塵に染まず
生命の限り 恩寵を満喫し
精々と生き その生涯に悔なし

万物の霊長 人の子らも亦
大自然に学び 草木に鑑がみ
あに、かえりみて 範とすべけんや

東京都支部だより

終戦直後の茫然自失と帰農の想出

副題・（酒の肴になる話）

矢口 純（東京都支部会員）

私は、仙台陸軍飛行学校で終戦を迎え、
母が疎開していた山梨県の上野原町に復員

した。九月に入って陸軍航空本部から、出頭せよ、との電報が届いた。

市ヶ谷の航空本部周辺は、進駐アメリカ将兵で満ち溢れていて、復員時の旧軍服姿だった私には、あまり気持ち良いものではなかった。

案内された部屋には、数人の精悍な若い佐官将校が階級章をつけて執務中で中央の西郷某中佐が立ち上り、私に向って、「や、ご苦労！ 貴公には千葉県の旧陸軍秘匿飛行場におもむいて農業をやって貰いたい。当座の食糧として米百俵と農耕器具、種子類等を渡す、輸送は復員局のトラックが協力する。入植者は津田沼留守業務局が復員兵から選抜して逐次増員させる。要は我々が祖国再建に立ち上る日まで、開拓戦士として、待機して欲しい」と半ば命令調であった。敗戦を機に帰農することに、違和感はなかったが、祖国再建云々という気迫の言葉には、ただただ、驚くばかりであった。中佐は、私の弟が農科系の学校を出たことまで知っていて、熱心に私に入植をすすめ、即答はさし控えて帰宅したが、折から高田通信連隊から復員してきた弟が大へ

ん乗気になって、思ってもみなかった兄弟開拓の生活が始まった。私達が入植した飛行場跡地は誉田村にあった。東京に生れ育った私たちには、農村の生活は万事が目新しかった。マッカーサーの行った農地改革も眼のあたり見た。そして自ら土を耕してみ、日常使っている言葉が、しばしば農業につながっていることにも気付いたのであった。この辺一帯は陸稲の他、落花生の特産地なので私達も、その次の年には二町歩ほど落花生を蒔いた。これを空から見ているカラスどもは、私や弟のいる場所から一番遠い畦に舞い降りて来て、片っ端からくちばしで土をほじくって一粒食べ、ジャンプしては又一粒食べて行くのである。

ほんとうにこれが「権兵衛が種蒔きやカラスがほじくる」かと感嘆したものである。しかし感心ばかりでもいられないのである。カラスのほじくり跡に遅そ蒔きながら種を蒔きなおよす。被害甚大の兄弟の開拓生活は明け暮れ漆黒の飛翔物体との戦闘の連続であった。夕闇み迫る頃、埒に帰るカラス共は、私達のすぐ脇を翔けぬげるとき、「ざまあ見ろ、新兵！」といった顔つきで

「カーア」と鳴いた。

(以上)

静岡県支部だより

勤労感謝の日を迎えて

第一〇回奉納吟詠大会を実施

十一月二十三日(祝)静岡県郷友連盟主催恒例の奉納吟詠大会が英霊の眠る県護国神社直会殿に於て実施された。

この日神社の杜も新緑から紅葉へ、また紅葉から落葉と季節の移り変りを感じる小春日和に恵まれて、県内各地支部から参加された一〇〇余名の会員を始め、国会議員の先生方、防衛協力諸団体代表等来賓多数を迎えて大会は、先づ天皇陛下御病氣の一日も早い御快癒を、村松会長の発声で東方に面して祈願選擇を行こない、国民儀礼の後、一〇回目の大会に当り清新な気持を持って吟じ英霊に捧げて戴きたい旨会長の挨拶があり、来賓の祝辞を戴き、祝電、メッセージの披露につづき石川大会実行委員長が開会を宣言して「郷友連盟を称える」を全員で吟じて午前部の幕明けとなった。

午前、午後の部とも独吟、合吟を始め仕舞・杖道に会員を始め協賛者の多彩な特別

出演を戴き一〇回目にふさわしい盛会を呈した。

また、遠来(小管町)の鎌田ハル様(九才)の飛び入り吟詠には、風邪気味とは言え、壯者を凌ぐ心意気に参会者一同ほのぼのと胸に迫るものを感じ、会員相互の親睦と郷友理念の高揚を期して大会は滞りなく終了した。

なお、本大会に連盟本部からわざわざ藤代事務局長が臨席されて終始御参観いただいたことを感謝申し上げ付記する。

石川県支部だより

婦人部研修会実施

石川県支部では、年度計画にもとずく、婦人部研修会を、十一月七日・八日にわたって実施した。

当日は婦人部長(河村千枝子)以下五〇名(新时期加入者四名を含む)が、加賀市片山津に集まり、映画「尾瀬の四季」外一本の教育映画を観賞し、そのあと婦人の立場として日頃から疑問に思っていることや、防衛諸問題についての質疑応答(回答者、杉野会長)など約三十分実施した。特に潜

水艦「くろしを」と一方的な報道に質問が集中し関心の深さで示した。

引き継ぎこん親会に移り、歌あり、踊りありで深まり行く秋の一日を楽しみ、またの日に元気で再会を約して解散した。なお当日は陛下ご不例の折から万才三唱は取りやめた。

北方領土返還要求署名運動

昨年暮に実施された、日、ソ外定期協議に於ても期待された成果は、残念乍ら見られず、僅かに従来繰り返された「北方領土問題は解決済み」と云う言辞を一步前進して、未解決事項として今後検討の余地を残す微かな光が見えたと止まりました。従って我々は手を緩めることなく、この運動を強力に推進せねばなりません。

その後の状況を左にお知らせします。

十二月三日 富山県 三六〇名

十二月二十一日 神奈川県 七二三名

十二月二十六日、千島歯舞諸島居住者連

盟宛発送済み。

(事務局)



郷友俳壇

野島 一良選

岩国 村井 一露

赤富士に白菜玉を固く巻く

構図のたしかさ。句の姿もまた、白菜の玉のように引締っていて快い。

伊豆の湯の夜々の天狼たぐいなき

石鎚に雲つきあたり時雨るるか

白粥に卵を落す霜日和

高砂 柳 穆水

病む鶏の臉とち居り冬うらら

下五で、この鶏もやがて元氣をとり戻すように感じられる。

冬風の燈台ぬくし鶯の輪

日月の足音たてて十二月

十二月になると殊更に時の経つことの迅さを感じる。同感。

雲流る風葬に似し鴉の贅

春日市 林 藤雄

故里の母なる山よ木の実降る

平凡なようですが、「故里の」「母なる

山よ」と畳みかけた情感の表現で「木の実降る」が生きいきと迫ってくる。

滔々と筑後大堰冬日和

筑後川の或る大堰を豊かに溢れ落ちる

水嵩に冬日和なのである。

バス停に駆け込んで来し息白く

湯豆腐の煮立ちお爛もついて居り

武蔵野 鶴間 俊子

玉椿凜と咲きつつ年歩む

恙なく備前の盃に新酒汲む

残菊のなほ愛ほしくいとほしく

冬晴や桐の実はじける音がして

東京の十一月から十二月は雨のない日

がよく続いた。毎朝、駅のホテルから

桐の木を眺めるのですが、ちよつと離

れていても、その実のはじける音が聞

えるように感じます。

福島 秋葉 紅風

産土のむかしのままの落し水

苔ほこら銀杏落葉の中にあり

裸木の峯まで並ぶ小六月

色つきし葉に初雪の懸りけり

岐阜 福井 利子

マネキンの無表情ばかり年の暮

大根の白さが目立つ新むしろ
ストーブのやはらかき色句座和む
ゆつくりとしまいの柚子湯につかりをり

松山 重川 兵介

師走寺広縁に数珠忘れあり

大師像雄然とあり冬紅葉

美術館出でて師走の人となる

一人来て余生の証日記買ふ

横須賀 大関 不撓

逞ましきその性が好き石菫の花

成程、石菫の花は逞しい。殊に荒海に

面した崖に咲くなどは、その最たる

ものか。

松山 青野さみえ

童心にかへるたまゆら枳殻の実

からたちの黄金色の実。この俳壇に

は、白秋の童謡を直ぐ思い出す方が多

いでしょう。作者はあまりに甘くなら

ないように『きこくの実』と詠まれた

のでしよう。からたちの実には、ふと、

暫く童心にかえる作者。鑑賞者も。

草枯れて波音ばかり鹿の島

なに待つとなう門に行つ夕落葉

姫路 野村 敬二

梟の聲に静もる柚の家

銃積めば車に眺み乗る狩の犬

獵犬の様子が躍如。

北風の山寺の灯の見えてをり

松江 大橋新太郎

国分寺の礎石かこみて霜柱

老夫婦借金も無く越年す

先ずまず、善しとすべきか。の心境。

歳晩や鳥居に積みし石も掃く

松山 石丸 綾子

海舐めて来し北風や窓を打つ

入院中の句のようです。窓を打つ北風

は汐風、海を舐めて来たたのであろう。

と、何だか「北風」にも親しみを感じ

ても居られるのであろうか。

石手寺の鐘の余韻や散り紅葉

脈をとる看護婦の手の凍てしごと

朝の見まわりで看護婦の手が冷えてい

ただけなのででしょうか。その上体温が

上つているのでなければ、と祈ります。

老妻の看護の窓の冬紅葉

自動ドア開きし前の菊の鉢

残菊を祖霊に供へ喜寿迎ふ

千葉 岡田 正秋

佐世保 青山 宇宙

冬瓜もころがってゐる朝市場

頬笑ましい朝市風景。

送り来し山芋里の味がする

初春や喜寿還暦の老夫婦

東京 石井 清勝

戦国の哀史をつつみ山眠る

北風や畑の中の祖母の墓

極月の風一島に荒ぶ夜半

福島 伊藤喜代子

つぎ足しのブロック塀や冬隣

バス降りる人そそくさと枯葉踏む

歩道橋そそくさのぼる白き足袋

去年の日記空白多き何故ぞ

何でだろう。こんなに日記をつけな

日が多かった。という反省。

商戦の日ごと日ごとの師走かな

神戸 泉 美冨

葉牡丹の渦くづしゆく日射しかな

枯菊を焚きて安けき日となれり

小牧 栗木 栄三

冬木山昼月淡く澄みにけり

うつむきし帽の深さや虎落笛

山口 福井 正坊

秋耕す単身赴任を戻り来て

マネキンの目には師走の憂ひなく

金沢 高桑 與三

爆撃の音さながらに冬の雷

轟おこし、ともいわれる北陸の冬の雷

に爆撃の音を思い出していられる。

初雪のわが足跡を振り返る

石川 松枝 外也

天井の木目鮮やかに小六月

口ついて念仏となる袖風呂にも

岡山 三村 白柳

配送の車せはしき師走かな

玉すだれの如くに軒の吊し柿

土の香も秋立つ匂いありとおもふ

東京 藤田 路水

恙なく日々送りたる師走かな

岡山 三田 久代

暮夜の野にひとり虫聞きをりにけり

久留米 執行みのる

遠い島だんだん近く海霧晴るる

富山 城山 曉舟

五箇山の風に仕上る吊し柿

佳什と申すべし。

岐阜 松野 啓子

耳遠くただ微笑みて小春かな

横浜 仁尾 久美

老猫は押入にゐて師走かな

松山 渡部 力

街路樹を啼としたる雀群

仙台 若生 葛圃

白菜のどさりと置かれ乾されけり

宮城 渡辺 正三

寒月や芋錢描きし狐隊行

静岡 渡辺 いつ

坐禪堂師走に吾は「無」に徹す

前月補遺

茨城 高須 湖城

筑波山浦に映りて化粧いけり

ひとこと 晩年のピカソの絵も、その元に

いたことを、私達は、よくよく考えねば

なりません。よく自然を熟視いたしましよ

う。そして出来るだけ心を無にして写生し

ましよう。近來の投稿に観念的な句、作っ

た句が減ってきています。見違えるほど句

の姿の佳くなつた方があります。心強いこ

とです。どうぞ力みすぎないで作句して行
きましょう。

近 詠

野島 一良

トランペット吹く寮生の冬日和

霧しぐれ犬おとなしく蹠いて来る

〇〇〇〇

投句締切 毎月十八日必着（翌々月号で発

表）。その時季の雜詠五句以内。葉書に

わかり易い字体で。

宛先 186 東京都国立市東二―十二―十六

野島 一良宛



森 武次選

宮城 若生 活穂

近眼鏡に老眼鏡をも忘れじと習はしを持つ

古希越えし歳

乾柿の妙なる色を軒先に孫を背にしてそと

触れて居き

宮城 高橋 覚

餌不足伝ふることのすべも無く飛び来る白

鳥数をふやして

茨城 高須 行雄

初獵の銃声聞きて勇み立ち一朝早く庭を掃

くなり

裏畑にはびこるままの泡立草鋏振上げて思

ひ切り打つ

福島 伊藤喜代子

朝まだき爆音高く飛びゆくはスクランブル

の誰が子なるらむ

夕風の冷ゆる小枝に散残る枯葉がくれにつ

たひくる小鳥

〇背と胸に孫を抱きて添寝すれば夢ほのぼ

のと暖かきかな

埼玉 鈴木 幸江

妻籠宿古きを保ち二百年きしむ廊下に天窓

あかり

溪流に露天風呂あり二岐の虻払ひつつ湯に

つかり居る

千葉 岡田 正秋

日々に聞く暗きニュースのその中に横綱千

代の記録明るし

〇豊作の甘柿熟れて梢には野鳥の分を取残

し置く

千葉 植弘 親孝

一週間見ぬ間に狹庭様変り早くも紅葉霜枯れもあり

日溜りにくつつき座る子猫達道行く我をじつと見送る

夕日今竜と見紛ふ雲に入る竜の目光のごと光芒差し来ぬ

東京 石井 清勝
ほのぼのと思ひを馳する初日の出住めば都よ伊豆の島じま

入港地無線電話で船に告ぐ八丈島の夜のしじまに

新らしき作業衣のまま笑み浮べ鏡開きの鍋を囲みぬ

神奈川 斎藤 信子

日向路の御所の入橋渡りゆきしどろ寂しき御所の塔詣つる(大友皇子五輪塔)

悲惨なるさだめに身罷る伝説の皇子の奥津城木の葉降敷く

御所の塔手向けられたるひともの花紅に愁ひを誘ふ

島根 長岡 利勝
戦死せる友をあはれと思ひしが老いて呆けしは尚あはれなり

翼切られ飛べぬ白鳥も時来ればつがひて卵

産むがかなしき

○城山の道に茶の花匂ひみて日ざしおだしく冬に入りゆく

兵庫 泉 美冨
大釜に焚き上りたる十夜粥湯気香ばしく秋燈うるむ

民謡のクラブ入門一年を白頭山節の完成に凝る

岡山 三田 久代
古い吾の日毎に想ふ亡き母の何時も溢れしやさしき面輪

徳島の航空基地の記念館慰霊の室に菩薩笑み給ふ

高知 中平 憲白

電車とはかくも雑音あるものか朝倉のみち特にはげしき

背後から野分吹抜けからからと落葉去りゆく山峡の道

長崎 荒木あけみ

日をうけて赤く熟れたる柿の実は枝もたわわに風にゆらゆら

車椅子退院前の訓練を母は娘に今日も励ます

○今月は、編集の都合で、締切を三日、切上げた。十四名、五八首のうち、三二首を採った。

○選者宅、三月二日全焼仮住ひ中のごと

る、前敷地に新築、十二月十七日引越致しましたので来月より、原稿は、前々月の十八日迄、直接左記へ

記

〒214川崎市多摩区西生田三―二二―三

選者詠 森 武次宛
信濃路の旅

西空に未だ残れる望の月雲を纏いて寒々と在り

多摩川の河口彩る朝の日に我が旅心定まりにけり

コスモスは岡谷の駅に咲き揺るる心ひきしめ信濃路に入る

塩尻の駅の空気は引縮まり木曾の山山紅葉始まる

藤村のかへり見しとふ恵那山は白雲まとい穏やかに見ゆ

蓮華寺の坂を登れば最果てに絵島の墓はひっそりと在り

亭亭と聳ゆる杉の根元なる絵島の墓は年経

◎選後小記

りにけり

戒名のほとほと消えし墓石をさすりつつ吾は去り難く居り

苔むせる絵島の墓をさすりつつなでつつ居ればいかづち聞ゆ

いかづちの音の優しも黄昏に絵島の墓に聞かいかづちは



大森風来子選

玉野市 三村 白柳

大臣の首引替えに消費税

一馬身総裁レースから遅れ

競艇にたかりがあった地方都市

民族を越えて救援アルメニア

贅沢に金を使うてまで瘦せる

評Ⅱ第一、二句は宮沢蔵相の退陣の波紋を詠み、第三句は、地方都市における収入源である競艇の収益に、飲み食いばかりがあるとは、の庶民の驚きである。アルメニア地震の救援も心あたたまるニュースである。

東京都 石井 清勝

折りたたみ傘が予報を信じない

平和の世古いものほど見直され片べりの靴いとおしむ二度勤め

評Ⅱ日常の生活のくりかえしの中から会得した人生哲学ともいうべきものを、折りたたみ傘や古い物の見直し論等によって巧みに表現されている。

広島市 坂井 愁山

蔵相の尻尾を切った消費税

深夜族に歓迎される店ができ

高齢化ものともせずにゲート族

日溜まりを犬が教える散歩道

評Ⅱ第一句、蔵相の尻尾は何を意味するかがこの句のポイントです。しかしその尻尾を切った犯人は消費税というわけです。

宮城県 若生 勝緒

ユーターンしたとは見えぬ派手な服

さるかに合戦まだまだ青い柿がある

ポーナスサンデー聞きしに優る人の波

年の暮れみんなくじ運強く見せ

評Ⅱ第一句のユーターンの派手な服を取り上げたのは面白い。さるかに合戦に青い柿を登場させる手腕にも敬意を表したい。

岐阜市 松田 要二

金持ちの共産党は喧嘩せず

国会は何するところリクルート野党達寝たり逃げたり審議拒否

幕引きが苛酷ならずや大統領

評Ⅱ第一句から三句までは、国会の審議を取り上げている。まさに当を得た作品である。第四句は、韓国の大統領の引退劇である。

福島県 五十嵐和風

濡れ衣の噂に耐えん無我の道

間接のうわさに老松耳かさず

消えぬ間に父の風紋コピーする

陸まじいホームに女神のシルエット

評Ⅱ第一句の濡れ衣、第二句の老松、第三句の父の風紋と言っているところに、作者の深い人生の洞察力が伺われる。

千葉県 岡田 正秋

未熟株税国会をそつちのけ

税国会吾等の血税サボで消し

過労死が四百死病の仲間入り

コンピューター喜寿まで呑んだ酒の量

神奈川 内山 昇

債権国海外援助も世界一

出る釘は皆んなに打たれるリクルート

評ニマルコス大統領から始まった国のトップの都落ちは、隣国まで飛び火したが、世界を見渡してみると、南米方面にも桐一葉の動きが感じられ、世界は不気味である

佐世保市 荒木あけみ

大なまらず政界ゆするリクルート
上位入選読めぬ字ばかり書道展
初春へ招かぬお客の消費税

岡山市 三田 久代

リクルートきりきり舞いの政治家さん
リクルート今日もリクルートで暮れる
真実に生くる処生や利鎌もて

久留米市 執行 実

鍋ものに戦友会の夜が更くる
エチオピア人間主張未だ足りぬ
松竹梅活けて床の間重ね餅

岐阜市 松尾 啓子

土光さん式部も納言も鯛好き
かしましいテレビたまには董べ唄
三億円時効になったよ出ておいで

富山県 城山東洋門

じりじりと下手法口説きの置炬燵

アルメニア天災寒き地獄絵図

(選後に) 例年より寒さのきびしい十二月の半ば、この稿を書きながら、陛下のご病状を案じながら日々ニュースを見ている。

さて、今月も熱心な皆さまからのご投句に接し、わが身もひきしまる思いで選句に立ち向かいました。作品の一句一句の裏に秘められた思いをくみあげること、いい勉強をさせてもらいました。

投句は、はがきで五句、毎月十八日までに左記へ。

701-42岡山県邑久郡邑久町山手 選者宛

(郷友柳壇と明記)

暮らしの知恵

一、煮こみ料理のふきこぼれ防止

スパゲッティ・ソースとかトマト・スープ、シチューなどをコトコト煮るのは、意外と手間がかかるもの。ついうっかりすると、ふきこぼれて仕事をふやす破目になります。そんなとき、ナベの回りに冷たいバターを塗っておくと、ふきこぼれは見事に防げます。バターの線まで上ってきても、

それから上へはふき上ってきません。二、アルミニウム鍋をみがくには

黒ずんだアルミニウム鍋は見ていて不快です。そんなとき、リンゴの皮が大変役に立ちます。アルミニウム鍋に水とリンゴの皮を入れて、グラグラと煮たててください。新品のようにピカピカになります。

お断わりと御礼

年末、年始は十二月二十七日より一月八日(日)迄休みのため、十二月ご投稿の俳壇、歌壇、柳壇の玉稿は已むなく十二月十五日で締め切り、選を急いで頂いた関係上切角ご投稿頂いたものが二月号に掲載されないという結果が生じている可能性がありますのでご了承下さい。漏れたものについては選の上三月号に掲載されることとなります。

なお選者の先生におかれてはその趣旨を了とせられ通常の期日前に選を終えられ玉稿のご送付を賜わり編集上の所要に応じて頂いたことを改めて深謝申し上げます。

金基友郷

名芳者金釀

(受附順) (敬称略)
(通算第47回目)

骨粗鬆症について

一、骨粗鬆症とは、骨に鬆(す)が入った状態になり、骨折しやすくなる病気です。日本人の平均寿命が伸びたという現実の中で、これにかかるお年寄りが増え、65歳以上のお年寄りの三分の一はこの病気にかかっているといわれます。

この病気にかかる時、ふと振り向いた瞬間に、または窓を開けようと体をねじったとたんに、背骨が潰れた(圧迫骨折)とか畳の上で転んで骨を折ったというようにとにかく骨が脆くなる病気です。

さてこの病気の原因は骨の中のカルシウム不足によるもので、通常男性で約一〇〇〇グラム、女性で七〇〇〜八〇〇グラムのカルシウムを蓄えておりますが、それが四〇〇〜五〇〇グラム以下になるとこの病気にかかると云われます。

二、この病気を予防するには、少しでも若いときから、食事(栄養)に気をつけたり適度の運動に励むことが大切です。予防の三原則は次のとおりです。

1、日光にあたる

日光の紫外線にあたると、骨の中でビタミンDが形成され、骨を丈夫にします。春、秋の日差しでいえば15〜20分ていど、少し腕まくりして日なたぼっこをするていど、夏の盛りは木陰でも、紫外線は十分吸収します。

2、よく運動したり活動する

運動としては、一日八、〇〇〇歩ていど歩くだけで十分、目安としては、10分歩くと、一〇〇〇歩といわれます。

3、食事の注意

カルシウムの多い乳製品、とくに吸収のよい牛乳を少なくとも一日、二〇〇ミリリットルはとるよう心がけます。牛乳のほかにも、乳酸飲料、ヨーグルト、チーズ、外に海藻類(一日の目安15グラム)、小魚、芝えび(30グラム)ほうれん草、小松菜(100グラム)など食べることを心掛ける必要があります。かかる前の予防が一番ですが、かかってしまつてからも、この三原則を守ると、進行を遅らせるだけでなく、骨の状態をよくすることが出来ます。

(愛知県支部扱) (2)

服部美行 今枝守恵

小出悦二

伊藤 章 横江春一

加藤徳商事株式会社

株式会社名鉄百貨店

株式会社名古屋三越百貨店

湯浅商事株式会社中部支社

十万円 今枝敬雄

同 森定興商株式会社

(神奈川県支部扱) (7)

十万円 横浜市中区郷友会

編集後記

◎初代エジプト防衛駐在官、現防衛研究所副所長、前川清先生の「中東の論理と心理」を筆頭記事として掲載しました。

これは八年近いイ・イ戦争が先に停戦となり、只今困難な和平交渉が続行中のイ・イ両国を含む中東、常に世界大戦の発火点となる可能性を含む中東、特に我が国にとつては、石油資源の六〇%以上を依存している中東の現況と将来を、政治、外交、軍事、経済、宗教の各般に亘つて余すところなく、分析、検討を加えて解明した貴重な論文でありまして、我が国の国策、特に外交遂行に幾多の示唆と教訓を与える好読み物であります。

毎号、国際情勢の現況を、今日的立場に於て解説され、国際状況認識の指針を与えて下さる、斎藤忠先生の国際評論と共に、じっくりと読んで頂くことを念願します。

◎我が国今後の安全保障、特に有事の際に於ける有効、適切な防衛力を發揮するための組織、機構を検討する場合、やはり一番の焦点となりますのは、いわゆるシビリ

ヤン・コントロールの問題であります。

これが現在の如く、その本当の真髓が理解されず、単に背広を着た内局の文官と制服を着た自衛官との対立を表現するものと曲解された認識に立つ場合は、真に役立つ自衛隊の育成は、困難なものになると断ぜざるを得ません。今こそ、その真の在り方を徹底的に究明し、この憂いを除いて置かねばならぬと確信します。

城田賢一先生の「シビリヤン・コントロール」の所論は、この問題をあらゆる角度から分析、検討し、その在るべき姿を示唆したものであります。安全保障確立推進の資として相共に検討して頂きたいと思えます。

◎米・ソ間にINF（中距離核）全廃条約が締結され、批准書の交換も終り、既に破壊、撤去の実施も進行し、これによって中距離核の全廃は完了し、引き続き、戦略核削減の交渉も実施されていることは事実であります。

仮に核廃絶交渉が飛躍的に進展して、人類の長い間の悲願であった核無き世界が本当に実現したとしても、ソ連には、西側諸

国を常に不安に陥し入れている、絶対優位を誇る通常兵器（人類を絶滅に追い込む可能性のある恐るべき化学兵器を含む）が残ります。通常兵器についても削除の方向は検討されていますが遅々として進みません。この現況を静観する時、世上取り沙汰されている所謂「デタント」の気運に浮れて国の防衛を疎かにすることは出来ません。この間の事情を重野先生が「政治条約（INF）に惑わされるな」に警告しております。注目をお願いします。

郷友

（第三十五卷第二号）
（通巻第四百八号）

発行兼編集人 赤羽根 徹ちとせ

発行所 社団法人日本郷友連盟

一六〇 東京都新宿区若葉一

丁目二十一 番地

電話(341) 四三八六

(353) 二三四一・二三四二

毎月一回一日発行

定価・一部二百六十円(送料共)

振替口座・東京四一七一八七七

印刷所 共同印刷株式会社

一 二 東京都文京区小石川四

の十四の十二

電話・案内台(817) 二二一一

帝国陸軍編制総覧

元大本営參謀 井本熊男 監修
元防衛庁戦史編纂官 森松俊夫(前篇)
戦史研究者 外山操(後篇)
上法快男 企画
四六判上製皮装
函入り/本文
一五〇〇頁/定
価七〇〇〇円

■明治建軍以来の陸軍編制の変遷を七つの時代
区分で概観(編制史概説) ■官衙、軍隊、学校、特務機関等の編制と主要人事を網羅(中央官衙
は課長級以上、軍隊は聯隊・独立大隊以上の司
令官、師団長、団隊長、幕僚等の氏名を記載)
■戦闘序列を重視した構成で、編制史や戦争史
のダイナミズムを表現する画期的な方法を採用
■常備部隊配備表、平常編制と戦時編制の区分
図など豊富な図表掲載 ■官衙・軍隊・学校・特
務機関別の索引作成 ■本天金使用・美装上製本

陸軍オール部隊名鑑

最新刊
芙蓉書房出版編 郷土の榮譽を担い、国運の隆盛に寄与し
た陸軍部隊総数約一万の詳細なメモリアル! 28000円

秘境西域八年の潜行

西川一三著 TBS放映絶賛の新世界紀行「秘境西域六千
キロ大探険」の原本 上下各3000円/別巻2500円

陸海軍将官人事総覧

陸軍篇(陸士四十五期迄) 150000円
海軍篇(海兵五十八期迄) 130000円
上法快男監修
外山操 海軍篇(海兵五十八期迄)
全将官及び主要軍人の履歴を年月日迄収録した大資料!

芙蓉書房出版

文京区弥生2-1-1 ☎03-813-4466
振替東京6351361 出版目録無料送呈

初回は切手300円で見本誌を送ります。

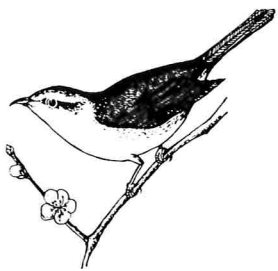
実物交換会誌

旧日本陸軍・海軍 実物 軍装品

■出品500点以上 ■定価500円 ■10日発行

戦中の木竹自転車・戦後のジュラルミン自転車
犬養毅(木堂)関係品、特別高価買い受けます。

旧軍隊関係の品物、何でも現金化します



交換誌 檻 襷 "S、係

〒710 岡山県倉敷市鶴形2-5-15
郵便振替口座 岡山6-11331

☎0864-22-9383

機関誌「郷友」購読のすすめ

混沌たる現代の世相を正しい目で直視したとき、日本は之でよいのだと感ずる人は、特殊の目的意識を持つ人以外には居らないと思います。

天皇陛下を中心とする、二千六百猶余年の世界無比たる我が国体の本義とその歴史伝統は、これを在るべき正しい姿で、子々孫々に伝えて行かねばなりません。

我が国の永遠の平和と、国民の真の幸福を守り続ける為には、自分の国は自分で守らねばならぬという、国民全部の愛国心とこれを基礎とした国力に応ずる国の守りを固めねばなりません。併し現状は決して安心出来るものではありません。

戦後に於ける極度の教育偏向とマスコミの歪、自由主義と自己主義を履き違えた放縦の横溢は、精神を無視し、己在って人無き、救い難い道義の退廃を招ねいでおります。その結果は暴力の横行、犯罪の増加、家庭の崩壊等々憂慮すべき状態です。

二つとない尊い生命を犠牲にして、今日の日本繁栄の基礎を作った靖国の英霊は故無き他国の内政干渉によつて無視せられ、一端開始された公式参拝すら見送られ、国家護持の実現は何時のことか分りません。剩

え今や、日本の行った戦争は総て侵略戦争であり、戦死は犬死に等しいとさえ極論する者も現われております。北方領土返還要求も遅々として進みません。

「郷友誌」はこのような我が国の現状と将来を杞憂し、如何にして之を是正し、正しい姿を回復し、子々孫々に伝えることが出来るかを常に究明し、示唆する識者の言を満載して啓蒙普及に努めておる愛国警世の書であります。

郷友連盟の理念に賛同される会員は申す迄もなく一人でも多くの方々の購読をお願いする所以であります。

(編集部)

一部 二六〇円 (送料共)

年額 三、一〇〇円 (送料共)

次の所に振替にてお申し込み下さい。

〒160 東京都新宿区若葉一―21

電話 ○三―三五三―二三四一―二

振替口座 東京四―七一八七七

二部以上、まとめてお申し込みの場合は割り引きの制度もあります。